

かちとさの聲にひらめく日の御旗仰くもうれし君か御代かき

皇軍の全勝を祝て

國のためいくばにすゝむますらその高きほまれを世に祝ふかな
皇國のたゞしき道をふむからにむかひくをこそかつへかりけれ
すゝみゆく皇御國のみいくばは高麗もろこしに勝ぬ日そなき
すゞ國の神のみいつのうはればや戦ことにかたざるはなき
たらし姫神のむかしにまされるはわか大君の稜威なりけり
海山もひゝきわたれる皇軍にやふれぬくにはあらしとそをもふ
かちとさのひゝきとさしゝくを人海にくぬかに仇をはふりて

川島 徳常
承 昭 卿
護 美 卿
忠 敬 朝 臣
重 嶺
葆 光
榮
正 臣
安 彦

御軍のつるさの光わはれ今かゝやきわたる御世にそあるかな

はき酒もくみはてぬまにわか軍またもろこしにかちぬとそきく

敷しまのやまとをこの太刀風に草木もなひくもろこしもかな

皇軍の太刀のひかりは千萬のくにゝも今そかゝやきぬらん

かちとさの聲のたえまもなかるへしてまもろこしのうみに陸に

日の御旗ふきなひかしゝ神風にいろうしなへる唐にしきかな

皇國の日の大みはたかゝやきぬありなれ川に北のみやこに

もろこしの海の雲きうちばらひとやかにみゆる日の御旗かな

皇軍連捷

皇軍の折くゝあくるかちとさにからの山川うちふるふらむ

弘 恭
松 市
恒 久
胤 明
久 子
道 守
詮
矢島 久 臣

やますよくわらしに秋の草も木もしをれにけりな唐土のやま
皇軍のかもしはまれはとつ國のうみ山かけてひくさわたれり

狩野 利房
三神 いま子

月夜思遠征

もろこしの原のしこ草かりはて、ありなれ川に月やみるらむ
ますらをば戈をまくらの旅ねして虎ふす野への月やみるらむ
虎のふすしこの荒野にいくさ人なほわらひつゝ月や眺めむ
しくさひとほくすゝみて虎はゆる山路の月をいかにみるらむ

松浦 隆
吉川田 鶴雄
西協 有隣
高柳 秀雅

寒夜懷遠征

風さゆる唐のあら野にはらからは霜をしとねの旅ねすくしも

鈴木 常次
馬上 孝太郎

太刀まくらぬるや霜夜のさむしろに寐るむ暇もわらしとぞ思ふ
つはものの草の枕やひかならんふすまきてしも寒きこの夜を
雪ましりわらしふく夜もふなはたにもりわかすらんふな軍ひと

渡邊 純
石井 小太郎

從軍行

ますらをど生れしかひに皇軍のかすにいる身そうれしかりける
ありなれの川にみつかふ駒もなほ敵にちちてそいさみ立らし
霜しるき軍のとほり月ふけていななく駒のひさまじきかな
風わたるありなれ川にこまどめて水かふ袖やすししかるらん

三神 榮治郎
武井 庸
高井 秀雅
狩野 利房

開戦の折よめる

皇軍に出たゝぬ身も國のため思ふこゝろはかはらさりけり

三神 歌州
川崎 久見

ありなれの川瀬の浪にうち洗ふやいはにちるやもろこしの月
武威八荒

渡邊 綱男

てりわたる日かけとともに日の御旗仰かぬ國もわらじと思ふ
靈鷹

渡邊 圓藏

あかりけり船にとまりし大鳥の名も高千穂のみねの雲井に
黄か海にたてしさを高千穂の船の名よふ鳥もきにけり

須田 豊常

あらたかも翼をさめてやどりけり神風すさふ高千穂のうへに

戸田 敬一郎

ははしらにおりる鷹や燕てふみやこ取へさしるしなるらむ

狩野 利房

高千穂のその名もたかくみはしらにねぐらためし鷹や神鷹

上岡 富治

高千穂やむかしは峯に今はふね神もくたりつ鳥もくたれり

齊藤 政徳

渡邊 純

日の本の名は高千穂のははしらに高きみつを守る鳥かも

平壤攻撃の前夜を想ひて

井田 秀生

あすまたてつきなむものをし草の今宵かきりの月と知らすや

豊島海戦

狩野 利房

かくはかりとしまの海のうきたからうきめみんとは思はさりけん

水雷艇の奇功

須田 豊常

千ひろなす海のそこひに鳴神のくしきいさをは世にひいきけり

吊忠死者

渡邊 綱男

君かため命とすて、ますらをかたてし功績は千代もくちせじ

石川 小太郎

ますらは名をこそこのこせ墓標見るかひなしと誰かいふらむ

戸田 敬一郎

うちいて、たまどくたけし益荒雄も天かけりつゝ、仇まもるらむ
君かため若葉のつゆと消ゆるとも雲井たかくも名こそくちせめ
ますらをかさらす屍にむす昔はとしふることに色まざるらん
よしや身はから野の露と消ぬれど譽は代々に如何て朽つべき

戦死將士の遺書を見て

かつ讀てたもとぬらさぬ人もあらしわはれかたみの水莖のあと
負傷兵を見て

君かため血しほに染みし衣こそ故郷にかざるにしきなるらめ

義勇奉公

百たらず八十のしこ草うらなひけ世々のめくみに報いまつらむ

田中 宗方

須田 豊常

三神 歌州

石川 小太郎

加藤 友之助

佐藤 寅三

皇軍全捷を伊勢大廟に祈りて

今ははやのらの軍のからたまをふきくたきてし伊勢の神風

雑詠

海に陸に戦ひまけしから人のころは夏も寒けからなむ
雨の夜も風のあしたも思ふかなある、高麗野の友よ如何にと
ますらをかつくす心は山櫻ちりてのちも人や訪ふらん
火も水も何か恐れむものゝ身の身は大君にさしけしものを
天つ日のひかりかゝやく旗風に虎ふす野邊の草もなひけり
ちはやふる神の御國の神風になひかぬ唐のしこ草もなし

久保 喜久

今泉 定介

岡崎 爲右衛門

鈴木 復次郎

佐藤 龜三郎

渡邊 直樹

穂積 積

加藤 友之助

捨すくき靡くから野のあかつきにむすふは霜のやいはなりけり
 木枯に月もころも、さゆるなりからの山邊の雲しはらへは
 敷島のやまとをこのほこさきに當らんものはあらじと思ふ
 しこふねのまほもかたほもみえぬなり戦のあとの今日の海面
 つゝの音のねたか〜とたかき名を雲井に擧げよますらをの友
 太刀つるきはく身ならねは水莖に御國のわたをかき流さはや
 散てのちいまやしならむから木の葉おのか招きし秋のわはれを
 武士の手にとる太刀は佩かねどもこゝろ一つに國やまもらむ
 神風にしきの御旗ひるかへし國のはまれを擧げよますらを
 とつくにの人も仰かむ天つ空てる日の本の神のみいつを

村田 與助
 渡邊 豐記
 羽藤 治八
 木口 弘記
 久保安 太郎
 阿部 なほ子
 渡邊 又平
 室井 の母
 木口 方

俳句

勝ちし名は世に蕪きて菊の花
 かちどきの門口も君が御稜威かな
 海山も我ものにして君が春
 限りなき海のはてまで初日かな
 神風にもろくも散りて唐もみぢ
 うてやうて思ふまゝうてから衣
 草むらやから紅のつゆしぐれ
 戻り路もまたいさぎよき花見かな
 合す度かつにはどりや大和種
 隈もなく照らす旭日や風光る
 勝はこる基には敵なし春の雨
 登る日に輝く菊や國の華
 皆伏して手をあはせけり初日の出
 しれた事ながら嬉しき今朝の春
 今朝晴れて豊さかのぼる旭かけ

鳳 幸韻 舍松 儀
 秀 品 湖 山
 雲 芳 禾 嶺
 澹 品 湖
 鳳 品 湖 儀 儀
 蝶 品 湖 遊 遊
 蝶 品 湖 遊 遊
 柳 品 湖 遊 遊
 佐 品 湖 遊 遊

詩語

甲午歲抄感懷

三島中洲

歲迫窮陰軍未還。遙知水陸路間關。摩天嶺險雪成壁。渤海灣寒冰築山。慰勞民誼私財贈。嘉賞皇恩寵詔頒。春風回暖日將近。奏凱聲騰朝野間。

羽峯曰、三四狀凍水艱苦、使人有墮指裂膚之思、五六亦實況、七八善寫人々希望

其二

老懶怯寒爐火烘。愧他將士競豪雄。武揚禹域國成立。義援封箕帝德崇。夜展地圖論戰畧。朝聞邊報喜軍功。恍然身在干戈際。自忘龍鐘廢疾翁。

羽峯曰、兩聯雄壯勁拔、猶皇軍勇武所向無敵、使讀者大聲喚快、

梅山曰、二律並似咄嗟、而成者不假雕琢、自然見腕力是大技誦、

威海衛行

威海之衛果何術。不威海兵法海兵。鐵艦幾々如山嶽。潛匿灣內間無聲。皇軍天墜何倏忽。忽自陸上來襲伐。雷艇如魚躍波間。直向艦隊相排突。前後夾擊避無地。迫蹙宛如囊中物。窮鼠窮極

羽峯曰
起手翁憤
用法

羽峯曰
句々勁健
猶我兵鋒

欲。欲。欲。萬砲亂發海山搖。我軍非貓皆熊虎。踊躍唾手笑相邀。定遠鎮遠敵艦魁。一擊覆沒又破摧。進退維谷幾殘艦。窮追打破如塵埃。此時風雪助砲力。烟耶雪耶天一白。萬雷轟地鯨鯢逝。血浪染水々山赤。獨有督將買餘勇。死守孤島不會動。百戰始知力難當。一死謝罪降書奉。受降盡放六千兵。占領北洋大軍港。嗷。嗷。獲大捷軍氣百倍豪。泰山可挾兮北海可超。一鼓北進不轉瞬。燕京城上旭旗高。

羽峯曰、壯絕快絕、使讀者不覺抖擻、

征清軍連戰連捷喜賦

南摩綱紀

朝取牙山夕碎舟。砲良刀利有奇謀。神功以後二千歲。驚動支那四百州。彈丸一發碎艦鐘。千百胡奴魚腹中。我武維揚滄海外。倖動不復借神風。天兵每戰奏奇功。瓣髮奴爭拜下風。勇略智謀凌宇宙。世人不復說豐公。

陷九連城

九連城堅鐵石。數萬貔貅守四壁。將軍是誰宋與劉。棄而遁逃歛影跡。平生所學果何事。三十六計第一策。我兵勇武虎傳翼。一朝占據不待夕。奪得大砲數十門。菟糧銃刀皆山積。素車乞降豈在遠。破竹勢成前無敵。大聲呼快揮老筆。賦此長句頌威德。

我龜曰
奇想天外
中洲曰
豐公瞻若
乎地下

黃海大捷

大艦如山鐵爲質。鎮遠定遠稱第一。睥睨四海自誇雄。屬艦十餘隊爲列。我艦迅駛直衝突。劇戰半日氣鬱勃。彈煙覆海海皆白。砲聲動天天亦裂。須臾轟破敵艦四。殘艦遁逃悉匿跡。黃海無復隻船影。唯見煙波茫茫接天濶。

靈鷹歌

吁嗟乎鷹兮鷹兮汝何神。利爪健翮冠鳥群。當此黃海艦隊劇戰際。砲煙漲空白日昏。天柱折兮地軸裂。衆鳥驚避亂飛翻。汝獨來集橋頭歛兩翼。凝視敵艦遁逃又沈淪。軍人捕獻玉墀前。鷹兮不驚馴且親。天顏有喜賜佳號。高千穗名千歲傳。君不聞神皇東征晨。神鳥嚮導平賊軍。又不聞鬼武起兵日。靈鳩出窠護其身。鷹亦莫表我全捷。須知凱旋不待春。吁嗟乎海東青自古稱雄鷲。不怪飛揚禹域奪百禽魂。

陷諸城壘

鳳凰城兮金州府。郭廣壁高鐵石堅。旅順港兮大連灣。天險人工稱絕倫。大砲小銃皆新製。彈丸糧食積成山。州維四百人千億。舉將全力來雲屯。宇內聽者皆卷舌。何況視者皆逡巡。我兵赴赴何勇武。觀如坦途與腐鼠。海軍所擊悉破碎。陸軍所攻皆略取。砲艦糧彈總我有。胡奴奔竄又捕

中洲曰
第三支那
病根
又曰
海戰寫得
如目睹

我蟲曰
不驚而馴
親故是一
句道靈妙
也
中州曰
石橋城人
未道破
我蟲曰
暗喻我軍
妙

虜。恩威並施真王師。抗者即誅降者撫。施粥與金濟窮困。各處乃設民政府。清廷君臣無顏色。乞憐求和窺息。嗚呼威武宣揚日出。天皇德。仁恩光被日沒。隳奴國。

秋月我蟲曰、痛快激越、而不涉狡憤可稱詩史、

又曰、長篇大作衝口而發、毫不見筋弛骨軟處馬、

文淵曰、老而益壯、先生可謂文壇伏波將軍矣、

三島中洲曰、連篇累章愈出愈壯、猶我軍連戰連捷僕輩病夫瞠若于後

奉送

大蠶親征

并序

川北長 囑

明治二十七年九月。征清之役。移大本營於蕤之廣島。越十三日。我大元帥陛下率陸海軍將。及文武諸官。發東京。臣長願拜觀儀衛。恭賦四言詩三十韻。以私鳴盛事。其詞曰
夙廓廟謨。善隣相輔。遣使通好。莫不順序。何物頑冥。妄自夸詡。口唱中華。傲然慢侮。不義我義。不武我武。威嚇弱國。虛利是誘。敢張聲勢。踞山蟠野。我有勇士。矯々貔虎。旌旆掩空。鳴罪擊鼓。凌冒大海。視若坦土。一戰覆艦。南陽之浦。屍葬魚腹。千百醜虜。于歡于牙。顛踣弗挂。捨旌棄鏡。奔竄如鼠。逆則勦絕。順在攸許。帝曰兵勞。朕豈寧處。移營廣島。以整其旅。駕發京城。儀仗容與。軍服爛然。群衆仰視。天顏有喜。麗日和煦。帝謂將士。勿踰繩

矩。兵弗可佳。切戒掠虜。勉哉將士。惟義之取。耀我國威。迺在斯舉。萬機一身。帝心獨苦。聖躬如茲。時敢弗勞。臣某爲帥。董督三軍。臣某爲佐。指揮部伍。心算弗差。架入其阻。凱旋之日。屈指可數。猷猷猷俘。式告列祖。萬戶稱觴。式歌且舞。

靈應行 并序

黃海之役。有應集我高千穗艦橋頭。獲之以獻焉。諸文士爭賦詩。表靈瑞。余亦效其製。疾風颯爽下青霄。雙眸炯々射波濤。翔翮萬里浩蕩際。快似鵬翼搏扶搖。祖宗有靈佑大義。此物無乃表神意。不怖礮聲如萬雷。來向橋頭徐戛翅。君不見神州勇士銳於鷹。擊盡孤兔無遺類。

旅順行

海門隘東如甕口。絕壁危巖擁其後。更築壘壘備鉅砲。一夫當之尙可守。我兵出沒何其奇。借問督兵大將誰。獨眼如電人辟易。何嘗當年李鷓兒。將軍臨發笑語衆。攻擊唯要一餉時。渾身是膽不怕死。志在報國豈顧危。聞說旅順山河美。大亞洲中無其比。一遇我軍忽擊摧。吁嗟乎地利之不足恃乃如此。

威海衛行

北門要港相對立。臂之溟鵬張兩翼。神兵猛鷲截其一。鵬也無復圖南方。摩天嶺百尺崖。天然城

壘倚嶽巖。兵雖多兮地雖險。彼膽已落何能支。鉅艦蔽海鏡山嶽。我有雷艇疾於雷。鐵鎖橫港果何用。轟然一聲艦體摧。殘艦漂搖逃無路。波間連樁相傾仆。敗餘醜虜何所憑。僅有二島小而固。忽見白旗閃海雲。哀籲乞降向我軍。可憐汝豈獨殉難。全軍日爲鼠竄身。劉公島似田橫島。不及賓客殉死五百人。

奉迎 大憲凱旋 并序

明治二十八年某月某日。清主選全權辦理大臣李鴻章李經芳等。來乞和。我大元帥陛下命伊藤總理大臣。陸奧外務大臣。帶全權辦理之任。商議訂約。和遂成。於是悉徵征清之師。越五月三十日。大憲凱旋。洵爲無前盛事。臣長願倣前日奉送詩體。再賦四言三十韻。以表微衷。其詞曰

明治中興。歷年廿八。班師振旅。五月卅日。旭旗齊翻。綠門聳立。歡聲撼地。萬衆迎謁。恭惟我皇。英武果決。義之所在。終始惟一。懲強扶弱。有序有秩。猗與我皇。夙夜宥密。受天眷命。弗敢懈逸。五條垂訓。懇々切々。養士有素。臨事踴絕。如鵬之搏。如兔之脫。渤海汪洋。摩嶺崢嶸。豈憚百艱。一誠銘臆。外則驍將。內則良嫻。籌畫弗差。勳加弗伐。拔堅挫銳。殲彼盪賊。旗鼓堂々。出師有律。皇威遠迄。風草維偃。燭火維熄。猗與我皇。天資惻怛。民無

彼我。遍、露、恩、恤。彼頑有悟。遠持使節。獻地請和。事歸恬謐。國家萬年。金甌無缺。鑿飲耕食。維維之力。遭遇盛時。踴躍奮悅。謹撰斯詩。聊擬頌德。敢望尹召。臣詞卑率。遠慰周宣。聖德鴻烈。

三島中洲曰。韓碑柳雅多浮誇之詞。此樸朴而章。有衣錦尚綱之觀。真是我帝國雅頌。

典雅質峭。不甚鋪張。而帝德之大。將相之勳。靡所弗有。詩至于此。始可傳之。不朽

乙未六月

祝凱旋

向山黃村

十丈旌旗海旭紅。貔貅百萬駕艤。鷹揚號令森嚴下。席卷山河指顧中。相國誰知勞轉餉。將軍便得策奇功。納降懲罪宣威德。長使遼東仰日東。忽從明治憶元和。萬歲嵩呼答凱歌。幕府當年平禍亂。王師是日戡干戈。一朝內外風塵息。滿殿鏗鏘劍佩摩。頭白遺臣真幸矣。尙留殘喘浴恩波。秦庭哭殺一包胥。細柳連營盡亞夫。聞凱自憐遺此老。執戈不得備前驅。先遮渤海扼航路。遂取

臺灣歸版圖。大筆豈無韓柳手。聊歌俚曲頌皇謨。

遙寄大島少將在朔北

淺田磯橋

干戈一動鎮三韓。何數當年鬼上官。朔北河山歸版籍。遼東父老拜衣冠。雲橫絕塞胡天盡。雪壓行營大野寒。乘勢須衝奉天府。將軍叱咤據銀鞍。

龜谷省軒評曰。風格宏亮。弁州遺響。

贈佐久間將軍二首

北京尅日奏凱歌。橫觀觀花意如何。日照三軍霞色動。春遊大燕鳥聲和。即今陸海干戈滿。自古關山盜賊多。萬里風雲歸顧阿。今看渤海起恩波。絕海戈船壓怒濤。風雲叱咤氣何豪。千山夜月悲胡角。四海朝肅瞰大旄。久矣老懷脾生肉。果然霸氣膽看毛。額手春天凱歌早。上有君王宵旰勞。

本田種竹曰。氣象格度。能奉古作家之矩矱。殆似一新面目者。委讀之下。佩忱曷禁。

凱歌二十絕 錄十

南陽灣口萬雷震。四艦唯看二隻逃。千百胡兵葬魚腹。劈頭第一不磨刀。
 突貫雷轟爭拔城。黃龍旗裂血縱橫。倚鞍顧盼雲迎陣。橫槊風流月照營。
 燕山要口誰能警。卅艦水師無隻影。威海礮臺一擊崩。魚龍寂寞空江冷。
 破竹兵威拔險關。捕來軍實積如山。更催支隊追奔虜。不使平壤一卒還。
 凱歌振旅大同灣。箕子廟頭弓月彎。掃蕩胡軍無隻影。風吹一夜滿韓山。
 萬里陷降關又關。堂堂振旅凱歌還。洗兵銀漢長低野。秣馬金風颯滿山。
 大野霜風動日旌。皇軍所向殲胡兵。已收鴨綠江邊戍。欲奪奉天府外城。
 膺懲仁義挫跳梁。扶弱善隣威武揚。一夜黃龍空墮地。夢寒四百四州霜。
 三軍期死不期生。百萬何常烏合兵。天子親裁軍國事。居然一士一長城。
 討伐滿清擁四鄰。耀威振武國光新。拳拳義勇奉公烈。不負日東天子臣。
 以上本田種竹施園。

垂死喇叭卒

木 內 天 民

萬雷震山岳。砲煙漲於空。烈哉喇叭手。鼓舞三軍雄。飛丸何處至。忽然洞其胸。吹去猶瀏明。

縷々聲漸窮。喇叭猶在口。氣已不通。芳名流千載。安城渡邊

細田東鄉曰。區々一喇叭卒耳。而其義勇忠憤如此亦可以卜皇軍勇武絕偏也。

吊丁提督

於威海衛 伊 豆 蘿 山

獻策不容奚學狂。好將殘艦赴溪浪。劉洲月暗按刀夕。逆莫毀譽嗟彼蒼。

松崎大尉

日 吉 昇

安城川急似亂雪。將軍勇奮意氣烈。何圖伏兵起此間。砲聲殷々天柱折。身擢萬卒躍入江。叱咤
 麾衆劍生風。無情飛丸貫胸膈。雖貫胸膈氣益雄。得勝取敗機一髮。可憐英雄命已沒。可知牙山
 陷落功。在君一死立萬卒

癸酉歲。予等同志。欲啓豐清國。獲罪政府下獄。迄今歲。乃有西征之舉。欲借政府之手。
 而就予等宿志。殆爲意料外之事。予以六月喪家君。八月獲疾。委頓床上者。九十餘日。不
 能奔走從事。殊爲遺憾。近日閱新聞紙。清廷有媾和之議。蓋予宿志在陷燕京。使十八省土崩
 瓦解。而收四五省之地。入吾版圖也。中道媾和。適足以貽異日之憂。而草莽間。不知廟議

如何。不堪憂悶焉。枕上偶得一詩。

甲午十一月

山本梅崖 憲

猛斷唯須就大謀。百年失計在優柔。江南李煜稱和。太祖不許。寬放唐遺河北髮。安史平。肅宗赦降將為節度使。概從姑息。遂有藩鎮跋扈之說。千里啓疆機豈數。東瀛稱霸事難酬。病床時結從征夢。不耐宵宵鳴劍鞴。

夢北京城

病餘無路請西征。空使寶刀匣底鳴。昨夜牀頭幽悶甚。城樓髮髻夢燕京。

平壤戰

伊藤 貢

壤城臨臨攬蒼天。劍閣在後大同前。維山維江得地利。金城鐵壁堅更堅城。外透迤邐餘壘。糧糧芻菱兩儲峙。將帥或稱一世雄。守兵亦是虎賁士。我軍將校富謀攻。部署夙成期大功。嗚呼干戈未交日。平壤既在合圍中。新興府邊進本隊。混成團與大江對。別有朔寧元山兵。迂回遠路出敵背。戰機已熟處。殺氣滿軍營。俄然劈耳來。巨砲萬雷驚。硝煙楚軍披練服。榴彈漢箭飛毒鏃。狼奔豸突戰數時。向晚白旗翻城屋。彼云願垂寬仁恩。使待明旦降轅門。彼有譎謀我所識。戒嚴容易納彼言。聞說大戰之後必有雨。雨師風伯互旁午。加之雷公與聖電。霹靂閃爍驟寰宇。果然

半夜求遁途。一群二群試奔趨。此時驟雨猶未霽。劍鏃銃殺馳又驅。鮮血玄黃流喋喋。叱咤一番奏全捷。快戰必竟何所同。恰如秋風拂枯葉。君不見扶桑將士鐵作肝。如熊如羆都植植。立唱凱歌紅旭上。恰好剪賊而朝餐。

苦寒憶遠征軍士

塞威凜々積陰充。凍雲慘慘四面同。梅花不笑爲不轉。唯見雪花舞大空。卻思萬里遠征士。身在朔雪體々中。霜刀夕閃奉天月。鐵馬朝嘶渤海風。假有稜山裂地勇。凍亡難竭滿腔忠。嗚呼皇天速回春帝駕。願使義軍奏大功。

威海衛戰中即事

青山 榮 四郎

奮擊縱橫殲虜兵。滿空殺氣壓軍營。日旗所向凡無敵。萬里秋風賦遠征。

凱歌

梅 林 不 染

神州男子本精英。一舉無前屠倭兵。吶喊縱橫夷膽破。眼中已奪北京城。

皇軍連捷入清地陷九連鳳凰諸寨感喜之餘作長句

戶塚仁溪

大陸千里幾重嶺。八道北連清東境。清軍翻幟集敗兵。九連城外陣營整。數十壘壁望鴨江。大兵爲守盛京省。唯恃天險不治德。不知要害成齋餅。吾軍到處向無前。鴨江雖深不用船。一夜橋成萬兵渡。吶喊猛進各爭先。馬蹄蹂躪寒林曉。霜葉亂飛彈丸煙。礮聲振天堅壘碎。寶刀映日鮮血。清軍如羊我如虎。一舉忽破城不全。殘卒倉皇仆又起。敗報日夜北京傳。吾兵追擊攻鳳凰。城兵燒城遁走避。收銃器而憐捕虜。國旗高閃異域天。清軍過處何暴戾。掠奪金穀苦良民。吾將爲置民政廳。免租除虐徧施仁。清民垂淚懷其德。自言神兵救吾人。請見神功征韓后。豐公雄略衝北斗。可惜半途落將星。朱明空爲覺羅有。嗚呼。今上英武超累代。大纛一動八道潰。皇軍所向如風靡。滿清山河忽粉碎。

我第二軍聞陷金州旅順口

渤海鎖鑰陸咽喉。半島突出擁海陬。群嶼環抱如浮鯨。層巒起伏似蟠蚪。天然勝地築砲壘。數隻鐵艦扼港頭。道是東洋第一固。要害堪誇五大洲。可笑恃險徒招贅。海陸兵敗軍不振。要地城壁罹兵燹。扼喉打背我軍迅。洪濤踏破獨眼龍。鐵騎爭夕冒險峻。旭日高輝整夕旗。雄風吹起堂々

陣。猛威如虎開金州。電閃雷轟全島震。巨炮爆裂碎堅門。府城瓦解忽蹂躪。餘威猶衝大連灣。灣頭守兵走旅順。到處清民皆歸吾。陷柵拔壘不用及。固隊養銳探敵情。一舉欲屠旅順營。三道分軍向港口。吾軍眼中無清兵。寒風凜々殘月冷。半夜進軍馬蹄輕。敵壘漸近天欲曙。曉煙濛々轟炮聲。兩軍交圍如雷霆。坤軸欲碎鬼神驚。艦隊扼港助兵勢。椅子山破二龍傾。松樹峯頭無松影。黃金山上摧黃旗。北洋戰艦不來援。清兵狼狽暫難撐。數十壘壁須臾破。戎器散亂屍縱橫。嗚呼東洋無雙固。一朝畧取摧敵勅。數百年間德澤亡。弊風盈國覺羅氏。貪吏驕橫苦士民。人情走利薄於紙。隣交一破起兵塵。連戰連敗不知耻。清皇亦是似秦皇。萬里長城不可恃。日本男兒真英豪。身命爲國輕鴻毛。稜々俠骨重厚誼。鯨鱓萬里破鯨濤。魏貅十萬向無敵。渤海灣頭望九臯。長白山下瑠氣絕。芙蓉峯上旭光高。

征清詩紀 二十

永澤香隣

魏貅十萬擁旌旄。誓掃胡塵意氣豪。請看邦人忠愛志。齊輕生命比鴻毛。霹靂一轟豐島天。幾千醜虜沒潮烟。王師勇武渠何敵。先獲北洋守備船。三道進軍衝敵營。崇朝襲破覺羅兵。凱歌開宴霜風慘。缺月光寒平壤城。

我鋒所向若雷霆。鮮血淋漓滿地腥。群隊蹈橋頻突擊。胡兵屍積練光亨。
神兵飛渡幾崔嵬。巨炮一聲萬雷轟。地下豐公合瞑目。王旗再樹牡丹臺。
赫々皇師勢壯哉。斥候還劫虜軍來。餘兵遁竄何邊去。輜重如山委道堆。
雷轟電激太孤東。浮屍海潮三月紅。奮戰瞬時胡敵亡。漲天煩火燬賊幢。
揮鞭萬騎鴨江浮。叱咤聲中亂急流。醜虜望風皆潰走。黃龍旗倒虎山頭。
巨艦蹴濤頻猛馳。虜兵何肯敵王師。堪憐北海咽喉地。撤守遁逃遂不支。
金州營又大連灣。到處王師勢拔山。鐵壘金城何所益。胡兵每戰撤重關。
車馬寬徭地免租。幕賓有策贊皇謨。燕山草木皆含笑。席卷滿州歸版圖。
偏師日々替皇猷。鳳詔又傳聖旨優。感泣三軍恩賜厚。頒將酒脯慰貔貅。
北地懸軍十萬兵。晨衝寧海夕榮城。可憐蟻芥非其敵。欲向大軍試抗衡。
大旗進去捲風雲。勇將驍兵盡偉勳。遙布恩威陽樂地。蠻民箠食迸皇軍。
朱明遺族太堪憐。獻物轅門說宿緣。不日王師還旆後。天恩重賜舊桑田。
女牛低地欲殘更。幾萬貔貅布露營。緘芥不侵軍紀肅。蕃奴安堵寂無聲。
虜軍無法悉支離。鴻業之成期日知。威海衛兼旅順港。重關守備屬王師。

陣雲擁帶蓋家屯。征馬無聲度塞垣。萬里懸軍追討路。雪花亂點壓戎軒。
王師獻捷豈庸捐。臥雪寢霜過半年。戎幕宵深論攻守。夢魂飛度冀州天。
清兵敗衄固無論。虜患如渠是犬豚。社稷迄今危累卵。素車蚤可到軍門。

豐島海戰圖

韓山之下渤海東。毒霧吹來腥膻風。列艦號令和逆浪。百千砲烟漲蒼穹。
或進或退激戰久。屍戶流海潮爲紅。我軍呼聲震天地。縱橫狙擊氣如虹。火輪旋轉似雷霆。
大駭忽碎敵艦幢。數千胡兵半沈溺。勢挫力折殘兵空。吁嗟我貔貅勇武真絕類。鍛鍊與彼亦不同。
機械硝鉛他所羨。清奴競何得雌雄。一幅展來勵義氣。凜然猶在彈丸中。

廿七年除日戌小波山砲臺

海 津 駒 治

兵馬不暇嘆逝川。窮冬受命戍山巔。朔風獵々暮營裡。篝火光中送舊年。

旅順口駐軍中偶吟

喇叭聲消夜營肅。天涯遙思故園人。野狐苦叫霜威重。老鐵山頭月一輪。

讀西征戰記述感

富疆之寶。在明倫尙武。由來賴敬神。

天祖宏謨千歲遠。日州正氣一朝伸。火山冰海誰非地。絳髮碧瞳彼亦人。 若使

皇威充六合。豈容賊語轉帝鈞。

靈鷹曲

楯 巴 城

靈鷹靈鷹汝果有何靈。々非在汝別有靈。然稱汝靈不無靈。則藉于他賴以靈。皇國由來鍾秀靈。山川人物靡弗靈。登爲富岳山自靈。洪作琵琶湖水亦靈。花是櫻兮花最靈。人者武士士殊靈。天子仁明靈又靈。海陸將士各爭靈。一朝交戰々何靈。百萬豚軍無一靈。海戰尤有特得靈。神艦所向達神靈。連戰連捷率倭靈。四百餘州沒生靈。高千穗艦名無靈。鷹托其身事益靈。逸氣凌秋魄愈靈。霜翎一搏壓群靈。嗚乎靈鷹之靈孰使之靈。正是據日東 天子之大威靈。

征清碑

(頌并序)

維明治二十七年夏鄰邦朝鮮之亂也我 天子拯之爲將經營焉而滿清百方阻格之且渝盟乃 天子赫

斯怒八月下宣戰之詔親征九月遂移大本營於燕南廣鎮於海於陸連戰連勝越明年震撼四百餘州而五月王師凱旋於戲此空前絕後之盛德大業若今歌頌之被之金石非達於文章其孰能爲之、頌曰
噫嘻清朝 辦髮頑驕 爲狂爲妖 嬰兒戲兵 以干大刑 悉民失寧 大難西巡 王旅渾々 乃翼
乃前 天昌我邦 協恭和衷 旣礪旣攻 將軍一呼 風揮日舒 電發騰驅 直搗遼東 親總元戎
掃蕩逆兇 批准剋期 復不踰時 振古無之 事有偉勳 皇威麟々 萬邦仰觀 巍々乎哉 地闢
天開 靈貺畢來 會是仇讎 靈滯天休 前爲斯羞 乃聖乃神 武克禍艱 文懷遠人 盛德隆興
化溢八紘 景福是膺 能令聖君 聲烈法法 不在斯文 地球東西 嗟神州兮 富岳天霽 可銘
可銘 勅此頌焉 永永万年

明治二十八年五月 王師凱旋之日

田 中 信 庸 撰

撰者曰く、本欄即ち頌贊記を置きしより、諸君子の寄贈に係る玉稿は、今日までに萬餘首の多數に及びたり。是れ諸士の敬愾心に富ませらるゝ結果と、本會も大に滿悦の至に堪へず。然るに如何せん、紙數に限りあるにも拘はらず、本記其他の頁數豫告に加倍せしを以て、到底玉稿を悉く掲載する能はざることとなり、且つ折角の名吟卓作も、平和克復の今日に於ては、

姑く登載し難きものあり、又一個人のみに關して、國民一般に縁遠きものあり、旁此には遺憾
きから歌句詩贊の如き類のみに就き、千分一を撰録し、他は永く保存し置き、更に拾遺編纂
の折に廻したるものもあり、依て諸君の厚意を謝し、併せて右の余儀なき次第を一言するこ
と斯の如し。

凱旋記

大元帥陛下の御凱旋

時に、初夏青緑の候、大元帥天皇陛下に、清國、膺懲の擧を了し給ひ、明治廿八年五月三
十日午後第二時を以て、玉體微恙もなく、東京に凱旋あらせられぬ。是れ千古の盛事なり。
我等臣民たる者、焉ぞ滿腔の赤誠を捧げて、歡迎し奉らざるを得んや。
回顧すれば、昨明治廿七年七月のことなりき。彼れ清國の驕傲不遜なる、漫に隣交を破り、信
義を失ふに至り、已むなく朝鮮の出兵となり、續し宣戰の詔勅となり、遂に九月廿三日を以て、
大韓の前進となる。爾來九閱月、日を経る二百六十、其間大元帥天皇陛下に、廣島大本營
にましく、往時天智天皇の木丸殿も、管ならざる質素粗雑なる師團司令部を以て、行在所に
充て、征旅の勞苦を厭はせられず、宵衣旰食、日に文武の臣僚と諸議を疑らさせ給ひ、之を内
にしては、出帥作戰の計畫、之を外にしては禦侮折衝の籌算、具さに辛酸を嘗めさせ給ひ、審
に軍機を親裁し給ふ、殊に勅して宣戰の趣旨を明にし、臣民に諭すに戰時の故を以て、恒業を
廢するとなく、戰勝の爲めに驕傲産を壊り、身を過まざらんとを以てし、平和克復就るや、勅
して陸海軍人を慰勞し給ふ。其聖意感德、諄々惻々、而かも宏謨遠猷、帝國の基址を恢にする
の規摹、儼として自ら其間に存す。生を此聖世に稟け、聖明の化に浴するを得るもの、於戲、
誰か感佩涕泣せざる者あらんや。
恭しく惟るに、皇祖國を肇め、皇宗基を樹て、より、崇神、垂仁、景行、仲哀、神功列聖の

經略固より大に雄偉なり、降て中古以來兵權臣僚の掌中に委せられ、而して蝦夷、陸奥の賊を平げ、元寇を攘ひ、韓土を征して國基を鞏め、國威を揚げたるが如き、其効績固より偉きらざるに非ずと雖も、七百年餘來、涵養し來れる武門の權柄を抑制し、封建の舊制を打破して、親しく、文武治教の大綱を握らせ給ふが如き、開國進取の大方針を立て、萬國と交通し、智識を世界に求むるの大業を創し給へるが如き、文武の政を擴張し、僅々二十有餘年を以て、歐洲列國が四百餘年の經營より得たる効果を收め給へるが如き、東洋破天荒の盛事たる、立憲政治を創始し而かも歐洲諸國が、血を流し屍を晒して漸く得たる憲法を上下和樂の間に發布し給へるが如き、是れ既に比す可くも非ざるなり。況んや征清の皇師を起させ給ひてより、水陸破竹の勢を以て進み、敵の艦隊を塵滅し、敵の廟寢に迫り、當初交戦の目的を成就して、韓國を清の羈絆より脱せしむると共に、土地を割き、金帛を容れ、以て和を請はしむるが如き、有史以降未だ曾て有らざる所、是れ固に我陸海軍將士の忠勇なる、我國民の義勇なるあづかりて力ありと雖も、陛下の威稜に由るに非ずんば安ぞ能く是に至るを得んや。且つ大元帥陛下には、恒に民の心を以て大御心となし給ひ、出征の將士、朔北の寒にあるや、親から行在所の暖炉を廢させ給ひ或は士卒の飢餓を憫ませらては、幾回か御膳を斥け給ひ、或は兵士の王事に斃れたる山開し召しては、其郷貫を悉しうも問はせ、將軍野に勞すれば、慰諭の詔勅を賜はせられ。或は議會の作置を嘉みして、優渥なる勅語を給へるが如き、仁義を以て化を施し、節制を以て、國事を行ひ、爲めに敵人悅服し、外邦亦文明の譽を傳へ、噴々として措かず。海表萬里、聖徳を仰ぎて止まざるもの、豈偶然ならずや。

更に謹で惟みるに、昨年清國滄盟の事あるや、六師堂々貔貅十萬、向ふ所山河震蕩し、天戈の背する所、勁敵風靡す、前に大捷を平壤黃海に奏し、後に偉功を旅順威海に收む。連戰連捷、攻めて取らざるなく、撃ちて勝たざるなし。清國遂に天威の抗す可からざるを知り、地を割き帛を容れて滄盟を悔ゆるの誠を致さしむるに至る。嗚呼、盛なる哉、皇威赫々四表に光被し、八紘に沾潤す。於戲、偉なる哉、國運隆々山嶽と俱に秀で、日月と並び明なり、寔に千古未曾有の盛事にして、帝國臣民の幸福大なりと謂ふ可し。今や媾和條約締結全く成り、東洋平和の克復を見るに至り、車駕其舊都なる西京を發して凱旋し給ふ。是れ實に明治廿八年五月廿九日のとにてありき、我等今此盛事に會し、幸に車駕を歡迎し奉るを得たり。亦欣ばしからずや、茲に聊か妄に秃筆を弄して、御沿道に於ける盛況の萬一を記して、永く史上に、留めん。

其一 京都御發轅

大元帥天皇陛下には、五月廿九日午前七時京都市なる大本營御出門、堺町門より三條へ、三條を烏丸通に出て、七條停車場に御着あらせられたり。此日供奉として歸京の人々は、小松大將宮、閑院少佐宮、兩殿下を始めとし、伊藤總理大臣、山縣監軍、西郷海軍大臣、大山陸軍大臣、土方宮内大臣、香川皇后宮大夫、野津大將、川上中將、伊東中將、其他大本營附文武高等官及び、第一、第二軍將校等にして、七條停車場には、山階晃親王、賀陽邦憲王兩殿下を始め、府廳吏員、府市會議員、各學校生徒等沿道に奉送したり。此日山階、賀陽兩宮殿下へは、車上にて拜謁仰せ付けらる。斯くて、陛下には、少時御休憩の上、全時五十分宛々たる陸軍音樂と、潮の湧くが如き奉送員の擧ぐる萬歳の祝聲を後に聞こし召して、龍顏殊に麗はしく、御還幸の途に就かせ給へり。

此日京都有志奉送迎會にては、七條停車場に、華麗なる大緑門を造り、停車場前には、いとも高大華麗なる凱旋門を設け、場外南の郊野にては、絶えず煙花を打揚げ、以て盛に御還幸を送り奉りけり。又停車場までの御順路は、戸々道を清め、門戸を飾り、新製の高張提燈を掲げ、聖壽萬歳の祝聲は、道の兩側より、盛に唱へられ、沿道に堵の如く、群集せる拜觀人、兩側立錐の地もなく整列せる各學校職員生徒等、何れも喜色滿々、此盛世の恩澤に沐浴せるを感謝せざる者ぞなかりける。

其二靜岡御着

五月廿九日午後六時、靜岡御着、馬車に召し代へられ、豫て御旅館と定められたる大東館にぞ入らせ給ふ。
 京都御發登御沿道士民の奉迎、頗る盛にして、國旗球燈到る處に連り、奉迎人の多き、其數幾十萬あるを知らず、二百五十餘哩の長程殆ど相連續し、特に地方小學生徒等が、其幼弱稚蒙なるに、尙ほ數里を遠しとせずして、御沿道各停車場に整列し、君が代の唱歌を奏し、凱旋歌を歌うて以て、車駕を歓迎し奉る處、其愛らしき貌、其欣ばしき様、是れ寔に愛國の權化にして、殊に國の華と見えたりける、其他各停車場には、祝砲に代へて煙花を連發したる等、其盛況喩ふるに物なし。幼老男女數里を遠しとせず、辨當を腰にし、或は一泊を兼ねて來集し、頭を地に着け、又は合掌し、或は手を拍いて、隨喜の泣に咽ぶ者ありける程なり。
 鳳城京都を發してより、馬場、米原、岐阜にて五分宛、御駐紮遊ばされ、名古屋御着の際、御發飯を召させられ、零時五十五分御發登遊ばされぬ。

名古屋市に於ては、停車場前に最も宏大なる綠門を設けて、御通轡を歓迎するの誠を致しぬ。天尙ほ此盛事にや感じけん、此日殊に晴明一點の雲翳なく、和氣緩健として天地に滿ら國旗翻として旭日東天の威を示し、球燈萬戸を飾り、滿都の歡喜を表す。停車場には、奉迎人雲集、霧合、留守第六師團長、參謀長、各高等官代議士及び、學校生徒、師團兵並びに近郷より群集せるの翁媪男女、無慮二萬を以て算ふ可く、さしもに廣濶なる停車場前の廣野、殆ど立錐の餘地もなかりけり。斯くて零時三十分御着登あらせらるゝや、百一發の祝砲を放ち、煙花を打揚げ、各隊の奏樂、學校生徒の唱歌、奉迎人の祝聲、兩々相混りて、天地爲めに震動し、山嶽爲めに崩壞せんばかりなり。

夫れより岡崎、豊橋、濱松に五分宛御駐紮、其他にも少時間御停車ありて、浴く歓迎を受けさせられたり。此日各地長方官は、奉送迎として京都府知事は馬場まで、滋賀縣知事は馬場より米原迄、岐阜縣知事は、米原より岐阜迄、愛知縣知事は、岐阜より濱松迄、靜岡縣知事は、濱松より靜岡迄、何れも警部長と共に奉送迎したり。而して鳳城の五分間宛停車あるや其間其地方高等官等は、皆車窓より拜謁を賜はれり。

此日御一泊と定められたる靜岡市は、前日來の準備全く整ひ、到處國旗隊旗幟々として空中に翻り、旗竿の頭標、銀は閃々として日に映じ、街頭に聯掲せる球燈は、綺羅星の如く、聖駕を奉迎するの人波を打つて、停車場近傍に立つ、其盛賑筆す可からず。

停車場南側構内には、幼稚園各小學校、各女學校の職員生徒列を正して立ち、其對側には、中學校、師範學校の職員生徒の整列するあり、停車場入口右側には、市參事會員、市會議員、市吏員等あり。其左側には、官吏、神官、僧侶、赤十字社員、貴衆兩院議員等列を正して立てる

あり、時辰六時を報じ、氣笛一聲美麗なる機關車は、御料流車を曳きて進み來れり。天皇陛下萬歳の聲と、山をも崩さん許りなり。陛下には、御氣色殊に麗はしく、御料の馬車に召させられ、徳大寺侍從長御陪乘にて、田名瀬、後藤兩警部先驅をなし、頂面には、駿河細工の竹器を蓋にして、朱塗の菓子器を辯にしたる菊花をつけ、其下に額面に擬して懸けたる行燈の中央には、「奉祝」の二字を阿部茶にて作り、周圍の額をば、名産の夏蜜柑と、稚茸にて飾れる停車場右傍の凱旋門を通らせられ、大東館なる大本營に成らせらる。小松參謀總長宮殿下、閑院宮殿下を始め、大山、山縣、西郷、野津四大將、伊藤、土方兩大臣、其他供奉扈從の人々、皆徒歩にて鳳蓋に扈從し、何れも一旦大本營に登り、暫時休憩の上、夫々腕車にて、定めぬ旅館に就かれしが、凱旋を祝し、各大臣各將校を觀んとて、大本營前に蟬集せる者山をなし、各大臣各將校の出づる毎に、其名を呼んで、萬歳を唱へ、各將校等亦一々會釋せられたり。而して大本營玉坐の前後には、静岡縣華進社長大日本總花繼織田利三郎氏の妙技によりて彩られたる猷華、青紅點々芳香馥郁、正に此聖世を祝するの誠あり。黃菊、伊吹木、菖蒲、松、檜、白鳥木、石竹、柘植(以上立華)白菊五本(生花)最も妙趣を存せる意匠あり。其他大本營正而席には、白菊黃菊十一本、白菖蒲七本の生華及び、勅奏任官旅籠へ四十五瓶の生華は、華進社を員一同より献納して、以て此凱旋を祝しけり。夜中に入りては、各街幾萬の球燈に火を點じ、烟花は絶えず打ち揚げられ、到處貴賤老幼群をなし、熱鬧繁華、不夜城を現出し來れる所、殆ど筆紙に盡す可からず。此夜八時大本營に於かせられては、

第一、君が代、 第二、國の爲め行進曲、 第三、「ラウラー」ワルツ舞蹈曲、 第四、軍歌
黃海の大捷、 第五、「蝙蝠」クワドリール舞蹈曲、 第六、長唄老松の曲、 第七、埃及國

行進曲、 第八、「樂の汽車」ガロツプ舞蹈曲、 第九、君が代、
等の演奏ありたり。殊に當地方に於ては、軍樂の如き、最も物珍らしくありければ、蟬集者更に多きを加へたり。

其三 静岡御發聲

京都御發聲より、静岡御着聲の御模様及び、御沿道の景況は記して前項に掲げぬ、茲に静岡御發聲の御模様より、新橋御着聲迄の概況を記さんに、大元帥天皇陛下には、翌五月三十日午前第八時、天領特に麗はしく、供奉扈從前日の如くして、行在所なる大東館出御、静岡停車場を御發聲あらせらる。御道筋には、昨日より一層の熱鬧を以て、小松原縣知事、市會議員、學校生徒及び、市民等奉送しけり。夫れより沖津、其他の諸驛を経て、九時三十分沼津、御發聲、五分間、疊に戦地より凱旋の歸途此地に在りし、第一師團兵の奉迎を受けさせられて、御發聲、御殿場山北の諸驛にて五分間宛御駐聲十一時五十分、國府津停車場に於て御晝飯を召上らせられ、應て御聲の横濱停車場に着しける時は、一時十分にして、横濱停車場に於ては、特に十分間餘御駐聲、縣市會議長等に拜謁を仰付けられたり。横濱御駐聲は、暫時のことなれば、更に目立ちしともなく、唯陛下及陸海軍萬歳の大幟、紅白の吹流は旋々として一段高く青空に聳え、滿街戸々の日章旗は、赫々として既に世界を呑むの勢あり。又海上に於ては、帝國軍艦八重山を始め、碇泊の各軍艦及び、内外商船等は、何れも滿艦飾をなし、陛下の停車場に御着あらせらるゝや、八重山よりは祝砲を放ちたるあり。午後一時廿五分御發聲、目出度新橋停車場に御着あらせられたるは、午後正二時にてありき。

御沿道の模様は更に更るとなく例によりて緑門を飾り、凱旋門を作り、赤十字社員、學校生徒職員、各官吏人民等、喜で狂するが如く、感じて泣くが如く、殆ど手の舞ひ足の踏む所を知らずして、聖壽萬歳、天壤無窮を祝して、其赤誠を表しける。唯其間に新趣向とも見ゆ可きは、馬入の清流に、數隻の船を浮べ、無数の國旗を樹て、奉迎せるが如き、又戸塚に七八間餘の模倣軍艦を奉迎艦と命名し、之に滿艦飾を施したるが如き、又品川より汐止に至る間に、海中數十艘の、舟を浮べて奉迎したるが如き、壯觀をして更に壯觀ならしめたりき。

其四東京御還幸

東京は、是れ大日本の首都にして、皇城のある所なり。殊に政治上の中樞たると共に、商業、工業其他總てに於ける中心點たるのみならず、我全國民の意思は、全く東京市民によりて、代表せらるゝものなり。故に市民の一舉一動は、地方人士の模範たるのみならず、正に地方人士の意思の發現なりと謂ふも可なり。今や 大元帥天皇陛下には、清國懲罰の舉を閲りて、目出度東京に凱旋あらせられぬ。東京市民は、如何にして、車駕を驩迎し奉りしか、我等は最も力を込めて、其模様を記し、以て如何に我國民が、赤誠を盡して國事に奔命するかを斷せん。

東京市民が、滿腔の赤誠は凝りて一團となり、集りて意を同らし、上は貴家高堂より、下は陋居隘屋に至るまで、戸々門々皆齊しく祝賀の微意を表したり。市内の繁昌混雜言語に絶し、四區八街に翻へる日章旗の光彩は、閃として天地を照し、陸離たる紅燈は、市内幾十萬戸の軒檐を彩りて、偉觀更に偉觀を添へたりき。此時に至り、百五十萬餘の市民は、各々家を虚にして、出で東より、西より、南より、北より、三里、五里、十里を遠しとせず、蚩集せる近郷近在の老弱男女、貴きも賤し

きも打混じ、新橋停車場より、千代田城二重橋に至る兩側に立並びしは、稻麻竹園も管ならず、宮城門外の芝生。日比谷原頭、波打てる如きの人出は、萬又萬を以て數ふ可く、青空に翻れる大旛旗幟は、所々に林の如く屹立し、其觀實に壯絶奇絶なりき。

新橋停車場の、朝來場内鏡の如く淨められ、氷の如く掃はれ、場外廣庭一面に眞砂を敷き、隅々に至る迄掃目を入れ、混雜の中、風雅洒清の趣を致し、入口及び大小の柱は、悉く青々たる鬼檜葉を以て纏ひ、野綴するに、金蓮花を以てし、其天井四壁には、國旗隈なく懸連ね、紅白紫白の幔幕を張り、場外には東京市有志者が、設けたる胡麻竹の装類に、黃菊にて「奉迎聖駕」と顯はしたる高さ十六間幅十間の大緑門に、大國旗を交叉して、巍然として立てり。而して河岸、幾處に紅白の幔幕を打ち、幾旛の旗幟翻るは、鐵道馬車會社、芝區有志者、日本橋魚市場、有志者等の奉迎所となす。

正午過ぐる頃より、群衆の入るを禁じたる場内の寂寞を破て、漸く喧騒となり、御通聲の親衛にとて來れる近衛の騎兵は、鐵蹄塵を蹴て先づ來り、漆黒麗々たるの馬車は大臣、顧問官、將官、其他文武官僚及び、華族等の面々を載せ、續々勢込んで馳せ來れり。午後一時過ぐる頃には、場外殆ど奉迎の高官大員を以て充されたり。御豫定の時刻近くや、一同は前後停車場に出て、鶴班鷲列、整々肅々として、鳳蓋の到るを待ち奉る。既にして流笛一聲と共に、火輪の轆る響は聞え、漸く近く漸く大なり。

午後二時「大元帥天皇陛下萬歳萬々歳」の聲は、潮の湧くが如く、山彦の木魂を傳ふるが如く、響きぬ。是れぞ 天皇陛下の新橋停車場に御着輦あらせられたるを、市民が異句同音に叫びし歡呼の反響にてありき。御料流軍は、數多の上等車、中等車を率ゐて來り。第六に至りて、野田、石

黒、寺内の三長官松本鐵道局長等あり、第七は即ち御料車なり、内外の裝飾、車中の置物は、最も潔清にして質素なり。陛下には、徳大寺侍従長を側に侍らして、温容を威貌儼然たる中に含ませ、御座し給ふ、列車の進行を止むるや、松本局長先づ下りて、御料車の扉を開き奉れば、陛下には、大元帥の軍服に軍帽召させられ、天顔いと麗はしく、車を出でさせられ、出迎の面々に御會釋あり、松本局長及び、兼て新橋よりの供奉員として、出迎奉れる丹羽、伊藤兩式部官御先導により、神器を御先に立てさせ、乗車場を御徒歩にて進ませられ、北の口より、直に宮内省より仕立置たる二頭立の御馬車に、徳大寺侍従長を御陪乗とし、側視にて御通行遊ばされたりければ、御道筋に整列せる無数の人衆は、畏れ多くも特に麗りしき天顔を拜するを得たりき、これ蓋し陛下の大御心に、益臣民を親ませ給ひわざと幌を除きて、路傍を顧み給ひしにて、此天恩の限りなきに、感涙に咽ふ者多ありき。陛下には九ヶ閏月の行營に軍國の御心勞を重ね給ひしにも拘はらず、去年御發策の折、見上奉りしより、更に御肥滿を加へさせられて、御血色亦いと勝れたるを拜し奉る、幾十萬の市民は、實に歡天喜地の思ひぞすなる。

鹵簿の次第は、第二公式を用ひさせらる。即ち左の如し。

警部 騎兵 丹羽式部官 馬車 式部 馬車 土方宮 騎兵
 警視 〇〇〇〇 伊藤式部官 馬車 次長 馬車 内大臣 〇〇〇〇
 警部 〇〇〇〇 乘馬 車馬監

御馬車 乘馬侍従 乘馬侍従 乘馬侍従 乘馬侍従
 野津陸軍大將 川上參謀次長 池田侍醫 櫻井内大臣秘書官
 伊東軍令部長 馬車 山口主殿頭 馬車 股野書記官 馬車 長崎秘書官

馬車 侍従二人 馬車 副官 馬車 副官 騎兵 警部
 侍従武官 二人 馬車 二人 馬車 四人 〇〇〇〇 〇〇〇〇 警部

鹵簿先づ東京市建設の大緑門を通らせられ、幸橋に出づ。此間各商業組合日本橋醫會等の奉迎所、芝口郵便局角には、東京郵便電信局官吏、東京郵便電信學校生徒の奉迎所あり。同所より幸橋に至るの間には、芝區民、本願寺派僧侶信徒、築地有志會、やまと新聞社、其他各種商業組合等の奉迎所あり。芝口より幸橋内に通ずる所には、芝區有志者が設けし、青竹に萬燈を吊したる凱旋門と、江木寫真店の大國旗、土橋の紅白だんだらの帳幕、各々光彩を争ひ、土橋々上目を放てば、新幸橋邊、玉山筆の「國光振張」の大旗大空に翻り、殊ま目立ちて見ゆたり。幸橋内は、奉迎者の最も群集せし所にして、元府應跡には、市の名典職員・區會議員・工業團體・三菱合資會社・第一百十九銀行・清酒問屋組合・日本郵船會社・東京能辨學會・東京商業會議所・株式・米穀・商品三取引所・田中銀行・東京銀行集會所・各新聞社員其他各種の團體「奉迎」「天皇陛下萬歲」等と記せる旗幟幾十旒、中空に翻りて、天を蔽ひ、華族會館門前には、菊花にて奉迎と題せる二間餘の大額を高

御道筋、孰れも威儀整々、萬歳歡呼の中を進行せられしは、當日陸海軍人は、殊に其威風の輝けるを見受けたり。

く懸け、數旒の國旗を左右に掲げ、門前と、道筋三十間餘には、公侯伯子男の面々、威儀を正して奉迎せり。

更に進んで、日比谷原頭に入る、此處御通行の衝に當れる帝國議會と、議長官舎との間なる大路に、巍然として空中に聳ゆるものあり。これぞ當日の大偉觀たる、東京市有志商人奉迎會の建設にかゝる、大凱旋門なり。高六十尺、高塔百尺、長さ三百六十尺餘、巾二十七尺に、卅三尺の廻廓にして、頂上には、國旗を掲げ、電氣、花瓦斯、各偉觀を呈し、其入口前額には、杉葉若々たる間に、菊花もて作りたる十六菊花、兩個の御紋章の下に、『奉迎聖駕』の四文字を、同じく黃菊に綾なし、其兩柱には、石竹花にて『東京市有志商人』の文字を記し、其後面に、『聖壽無疆』と記せる額を掲げ、表門外には、『國光宣揚』『皇威發揮』の大紅旌輝々として偉絶、更に壯絶、沿道第一の偉觀なり。而して鹿鳴館角より、外務省門外に至る間、明治學院・大日本農會・火災保險會社・自由黨・國民協會・攻玉社・赤十字社・貴族院議員・麹町公民會等の、前日來竹木をもて柵欄を設け、幔幕を打ち繞らし、各日章の旗幾十旒を翻へし、殊に凱旋門側赤十字の旗を中空に認めし、諸人の感想を打ちたりき。而して豫め奉迎所を設けざる四方よりの奉迎者は、道路の兩側に蠅集して、左しも廣漠たる日比谷の原、全く人を以て填充し、中央僅に一線の通路を、辛うじて餘すのみ、となり。喧々囂々其雜沓熱鬧殆ど命狀すべからざるなり。御着前一時、近衛師團補充大隊兵は、人波打てる雜沓を破て、豫定の赤十字社奉迎所側に序列正しく進行し來れる時は、殆ど雜沓の極點に達し、老幼婦女子は、聲を揚げて其苦痛を訴ふるも、四面皆人を以て包圍せられ居れば、全く逃路を失ひ、揉みに揉まれて仆るゝあり、叫ぶあり、或は怒るもあり。幾位の憲兵、巡查の制止も、殆ど其効なかりき。

既にして、鹵簿は幸橋を左折し、整々凛々前進す、兩側の奉迎人は、一齊に帽を振り、萬歳を唱へ、一騎一車の過ぐる毎に、聲は潮の湧くが如く、聖駕通御の時の如きは、萬口一齊、我を忘れて叫び出せる萬歳の聲は、百電の一時に墜つるが如し。鹵簿は、堂々凱旋門を入りて、霞ヶ關に出で、右折して櫻田門に向ふ。門前にも、東京商人が設けし凱旋門あり、新橋凱旋門と、其揆を同らせり。海軍省建築場の長屏には、黒筋入りたる幔幕を打廻し、杉葉と紅白染分の紐にて幕を絞らし風情を見せ、旭旗、紅燈、堤涯に添へる垂柳の青々と、兩々相反照したるの光景は、美觀極なく、千代田城内新緑萬叢裡に、五彩の旗幟相交り、人と人・衣と衣・傘と傘、旗と旗相接し相觸れ、身動きもならざる様驚嘆々々、又驚嘆、寔に聖代の盛と謂ふ可し。城前廣場には、朝來煙火を打揚げ、一層の壯觀を呈したり。其奉迎の団体は、二重橋、櫻田門間左側に、法科・醫科・理科・農科・各大學・高等師範學校・内閣・司法部・文部省・高等商業學校・工業學校・東京府各中學校・師範學校・學習院・式部職・樂隊・第一高等學校・美術學校・其他各種學校及び、各種団体等右側に、砲兵工廠・國民英學會、其他諸官省の奉迎者を以て滿々たり。

此日奉迎の人々は、有栖川威仁親王殿下を始め奉り、黒田樞密院議長・榎本・陸奥・渡邊・芳川・西園寺・野村の各大臣、東久世樞密院副議長・副島・川村・福岡・佐々木・勝・佐野・尾崎・高島・仁禮・田中・大島等の各樞密顧問官・三好大審院長・黒川・山地・野崎・滋野の四中將、伊藤・兒玉・原・松岡・鈴木・金子・牧野・清浦の各次官、園田總監・三浦府知事・蜂須賀貴族院議長・山本海軍少將・川口海軍主計總監・佐野大築・沖原の三陸軍少將、橋本・高木・兩軍醫總監・近衛・二條・徳川・三公衛・醍醐・徳川(水戸)・兩侯爵・後藤・大木の兩伯爵、伊東・林・曾我の三子爵、其他陸海軍將校・各省高等官・上下兩院議員二百餘名なりし。

聖駕静々として、正門前に臨まる、時、軍樂隊は、唳々音が代を吹奏し、群衆は齊しく萬々歳を唱ふ。此時煙火は、祝砲に擬し、續けさまに廿一發打揚げたり。陛下には、始終御機嫌殊に麗はしく、午下二時四十五分稍過ぐる頃、日影長閑き千代田の城に、目出度御還幸あらせられたり。於戲、是れ千載一遇の盛事、今古未聞の壯觀にして、而かも千載希れに見るの靜謐を以て、了するを得たり。是れ實に 聖徳の臣民に感孚するの致す所にして、又臣民の赤誠の致す所なり。茲に謹で記し奉る。

皇后陛下の御還啓

我 皇后陛下の坤徳淑儀、内 聖明を助け、外衆庶を憐み給ふ、其仁其慈天下の仰ぐ所なり。今や 皇師の凱旋と共に、還啓を仰出さる。京の山水、瀆名の潮足柄の雲、百里の山河御恙もましまさず、昨日 大元帥天皇陛下の、嚴くしき天顔を迎へ奉り、今は 皇后陛下の麗はしき尊容を拜み奉るを得たる、是れ一世の壯舉、全府百五十萬臣民の歡喜、何の辭を以てか之を形容せん。皇后陛下には、廣島より轉じて京都御所に御坐ましけるが、大元帥陛下御還幸の翌日、即ち明治廿八年五月卅一日を以て、御還啓遊ばされぬ。滿都の士女往去り、還來り、絡繹織るが如き奉迎人は、前日と更に變るとなく、新橋停車場の廣場は、午前十時過ぐる頃より、既に立錫の地だも餘さず、雜沓中に御着車の時を待ちぬ。却説 皇后陛下には、御豫定の如く、五月卅日午前七時五十分京都御所御出門、鹵簿整々七條ステーションに着御あらせられ、奉送の各官衛高等官、京都市各名譽職員等の敬禮を受けさせられ、一々御會釋、場内を御徐歩あらせられ、香川太夫・田中亮心得の御先導にて、御料車に召させ

られ、唳唳たる樂聲の裡に、玉顏麗はしく、七時五十分御發車あらせられ、名古屋に於て暫時御休憩の上、午後六時靜岡御着、御料の馬車に召させられ、高倉典侍御陪乘・香川皇后宮大夫・三宮皇后宮亮及び、女官等數多の扈從供奉して、御泊所大東館に入らせらる。御沿道の御模様、前日と變るなく、又殊に記す可きなし。翌二十日午前八時、靜岡御發車、午後二時と申すに、萬歳の聲に迎へられ、芽出度新橋、停車場に御安着遊ばさる。當日御出迎の人々には、小松宮大將・閑院宮少佐を始め、各皇族・御息所・伊藤總理・西郷・大山・野村・渡邊・榎本・西園寺・芳川・土方の各大臣、黒田樞密院議長・佐々木・佐野・副島・海江田・仁禮・尾崎・福岡・高島の各顧問官、徳大寺侍從長・野津大將・伊東・野崎・滋野・岡澤・山地の五中將、近衛二條の二公爵、久我・池田・細川の三侯爵、後藤・大木の二伯爵より、華族夫人・各省高等官、并に女官等數百名は、綺羅星の如く、プラットフォームに奉迎しける間に、國旗と軍艦旗とを交叉して、金色の菊花を前頭に打ちたる御料の涼車は着しぬ。皇后宮職、官吏を御先導にて、直に御馬車に召させられ、室町典侍御陪乘にて、御馬車は始めより幌を去り、萬歳聲裡を、徐行し、數々の奉迎門を通過して、目出度御歸城あらせられぬ。御服装は、薄紅に芭蕉葉を出して貴珍なる織物の御洋服に、薄構色に駱駝毛をもて縁取たる御洋傘を御手にし給へり。當日の鹵簿は、警部(馬)・騎兵半小隊・近衛將校(馬車)御旗・御馬車・近衛將校・警部(馬)騎兵・女官(馬車)大夫・侍醫亮(馬車)警部(馬)警部(馬)外に供奉四人乗馬車一輛なり。

皇師凱旋

昨夏朝鮮事件の起るや、清國隣交の道を失し、漫りに東洋の和平を破る。我 皇赫怒宣詔一たび

降て、膺懲直に加ふ。日旗の指す所、戦へば必ず捷ち、攻むれば必ず取る。滿清四百餘州、爲めに震駭懾伏せざるなし。是れ職として我允文允武なる 天皇陛下の御威稜に由ると雖も、亦我將校士卒の忠勇義烈なる、能く韓山の炎熱、滿州の氷雪、渤海の風濤と戦ひ、能く旅順、威海衛の天險、海城、牛莊の堅城と戦ひ、鎮遠・定遠の雄艦と戦ひ、困乏と戦ひ、飢渴と戦ひ、直前勇進敢へて少しも屈せず、敢へて少しも撓まず、連戦連勝の効を奏したるもの、其壯烈淋漓たる愛國奉公の熱情至誠に外ならざるなり。今や平和條約已に就り、膺懲の目的茲に達し、帝國は新領地に向て必要の守備を置くの外、復た軍隊艦隊を駐むるの要なきに至り、赫炳たる光譽を擔うて凱旋す。吾人國民たるもの、其平和を迎ふると共に、此平和を恢復して、永久の鞏固を興ふるに、最も力ありたる、帳中において、作戰の大計畫に任じ、錦旗の下に於て、攻城野戰の勞に服したる軍隊艦隊の勳勞を謝し、真情實意を盡して、盛に之を驩迎せざる可かざるなり。

其一大總督府の凱旋

征清の壯舉起りてより、故有栖川參謀總長宮殿下の後を繼ぎ、克く 皇上陛下の意を體して、日夜鞠躬邦家の公事に身を致し、軍國の大事を畫策して怠りなかりし小松宮彰仁親王殿下には、出征大總督として總督附員と共に、旅順なる大總督府に駐まらせらるゝ、三十有餘日、其辛酸勤勞、寔に國民の感謝する所なり。今や平和克復と共に、凱旋歸朝せらる。我國民は如何にして、之を驩迎し奉りたるか、記する所を見よ。

明治廿八年五月十七日午後三時、和泉を以て嚮導艦とし、橋頭に親王旗を掲げたる御召艦威海丸之に次ぎ、千代田之に殿艦として、將に旅順口を出でんとするや、風潮の爲めか、將た舵手の誤か、御召艦は右岸の巖壁近く寄りと思ふ間もなく、船體や、傾斜せしむ、動かすなりければ、殿下には横濱丸に御召換遊ばさるゝとどまり、出帆は翌十八日午前五時に延期せられたり。前日來碇泊の扶桑・千代田・和泉・龍田・筑波は、滿艦飾を爲し、御召艦の出帆を待つて二十一發の祝砲は、各艦より放たれて、其行を祝しけり。日や天空颯々なく、風穩に橋頭の旭旗は、東天にさし上る旭日に映じて舞ひ、國威を四海に示すが如く、漢瀾瀾々波紋を織りて、東洋の平和を祝するが如く、一隻の汽船、二個の艦艇、堂々浪を蹴て凱旋の途に就く、亦壯觀ならずや、五百哩の航程、旅順を發して纔に二晝夜半、無事馬關に至る。御召艦は檢役を行はせられんが爲め、先づ啣腕たる樂隊の奏樂と共に、五月二十日午前九時三十分彦島に投锚せり。此日馬關門司の兩港には、戸々日章旗を交叉し、兩岸の阜頭、或は山上に兩市の士民、老弱男女群聚して凱旋を祝し、碇泊の船舶は、皆滿艦飾を施し、御迎委員は、汽船甲板上煙火を打揚げ、盛に萬歳を唱へ、國威の宣揚を祝す。當日午後六時馬關を出て神戸に向ふ。

廿一日午後一時、神戸港に御着あらせらる。時に御召艦の碇泊するを合圖に、海岸なる字白間波止場より煙火を打揚げたり。殿下には、午後二時屬僚と共に、御上陸遊はされ、秋山兵庫縣書記官の先導にて、川上中將・大島寺内兩少將・野田監警長・石黒軍醫總監等、御侍して御旅館宇治川常盤に入らせらる。此日勅使岡澤中將・中村歩兵大佐及び、周布兵庫縣知事・秋山同縣書記官等は、棧橋にて、縣市會議員・赤十字社員等は、棧橋際にて、其他師範學校・商業學校・各小學校等の職員生徒等、思ひに／＼に御道筋に奉迎したり。

翌二十二日の京都市は、朝來國旗を樹て球燈を掲げ、七條停車場前には、縦横に綱を張りて、聯隊旗、軍艦旗に摸したる旗幟數百を懸連ね、鳥丸通には、大國旗を交叉し、電柱は總て紅白の巾巾を

以て卷き、更に無數の紅燈を吊すなど、準備至らざるなく、盡さざるなし。又鳥丸通兩側には、高等學校・師範學校・中學校・醫學校を始め、各三校の生徒職員、順次整列し、停車場前には、奉迎有志會員、各々所を定めて、整列して控へたり。是れなん午後一時三十分神戸發、同四時京都着の臨時流車にて、凱旋せらるゝ小松總督宮殿下を歓迎するにてありき。時の至るや、二十一發の祝砲耳を打て轟き、唳唳たる樂聲は、殿下を導きて、大本營より差回されたる馬車にて、大生大佐陪乘して登營し、大元帥陛下に御對顔あり。隨從の幕僚も、亦拜謁仰付らる。殿下には、隨從の諸員と共に立食を賜はり、午後七時御退出、御旅館に就かせられたり。當日土方宮内大臣は、特に勅旨を奉じて停車場に御出迎ひ、伊藤・山縣・松方の各大臣、杉皇太后宮大夫、及び、在京都華族一同、兩本願寺法主等、皆停車場に奉迎したり。因に記す、大總督府は、皆小松總督宮殿下の登營と共に解かれたり。

其二第一軍の凱旋

日清事起るや、先づ行いて炎熱流金の候、成歡及び、牙山に戦ひたるは、是れ大島混成旅團なり。平壤の野、風雪氷結の間に大激戦して、能く我勇を世界に顯はせるもの、是れ第一軍第五第三師團ならずや。虎山・九連城・鳳凰城・岫巖・海城・缸瓦寨等に轉戦激闘して、能く陥落したるもの、是れ第一軍の手腕智謀ならずや。蓋平・牛莊・田庄臺等に轉戦して、能く今日の効を致せるもの、是れ同じく第一軍の力預つて力ありしにあらざるや。第一軍は、始め山縣大將に屬し、後野津大將の率ゐる所となり。湖北胡雪の間、最も辛酸を嘗め、困乏を忍びたるものなり。而して平和條約就り、漸次凱旋の途に就く。

第一軍司令部は、五月廿一日午後三時を以て、金州より大連灣に出で、東京丸にて、海上無事兵庫和田岬に着し、檢疫を受けたる上、廿五日午前六時半、神戸港内に入り、中税關棧橋より上陸し、閑院宮殿下には、宇治川常盤に入らせられ、野津第一軍司令官は、諏訪山中常盤に投宿したり。其一行は、閑院宮殿下を始め奉り、小川・矢吹兩少將・吉澤監督長・石坂軍醫總監・以下將校・下士卒・軍夫等、總二百九十一名なり。而して閑院宮殿下・野津司令官等の一行は、全廿八日午前十一時を以て、大本營の所在地なる京都停車場に着したり。小松宮殿下・伊藤總理大臣・山縣・大山・兩大將以下・各將校・文武高等官等、停車場まで出迎ひたり。野津司令官には直に登營して拜謁仰付けられ、次て 大元帥陛下の御還幸に供奉扈從して、東京に凱旋されたり。

第三師團の凱旋、第三師團長桂中將の一行は、六月九日を以て復州を發し、普蘭店に泊り、十日金州に着し、野戰第三司令部は、十八日大連灣を出帆、一行は廿五日宇品より、神戸港に着、暫時休憩の上東向、午後零時五分、名古屋笹島の停車場に着し、數多の群衆に歓迎せられつゝ、各將校と共に、人力車に乗じ、幾多の凱旋門を通過して、司令部に入り、兩陛下の御眞影を拜し、夫より大迫第五旅團長、別役留守第三師團長事務取扱・井上、新任第六旅團長と共に、馬車を驅りて歓迎會場に臨む。歓迎會長徳川侯代理、柳本名古屋市長は、先づ立て祝詞を朗讀し、次に三方に土盃と、乾海賊とを戴せたるを持ち出で、祝酒を呈し、了て師團長萬歳、師團の萬歳を祈り、夫より桂師團長の答辭あり、茲に式全く終り、桂師團長は、二人の令息及び、宇治田副官と共に歸邸し、各將校も次で退散せり。當日市中一般は國旗・球燈を掲げ、徳川侯爵・別役留守第三師團長事務取扱・井上第六旅團長・青山陸軍少將・留守師團の諸兵成川三重縣知事・各裁判所判檢事等皆停車場に出で、盛に歓迎せり。而して當日同一行は、桂野戰第三師團長を始め、大迫第五旅團長・木越

參謀長・塚本第六聯隊長・甲斐監督部長・中泉軍醫部長・將校及び同相當官三十六名、歩兵第六聯隊第一中隊等なり。
 第五師團の凱旋、野戰第五師團司令部は、六月廿四日復州に着、七月廿日大連灣出發、凱旋の途に就く可き豫定なり。

其第三軍の凱旋

遠く韓海の波濤を截り、彼が東鎮扼塞と怙む所の大連灣頭に上陸し、金州を陥入れ、旅順を屠り、蓋平・牛莊・田庄臺に、其勇を輝し、榮城灣に上陸し、威海衛に戦ひて敵膽を寒からしめたるもの、是れ實に大山大將の率ゐし第二軍の功勳なり。平和克復に當り、等しく壯絶快絶なる歡迎聲裡に凱旋す。亦快事ならずや。而して凱旋記事は、皆同事を以て繰返さるゝなり、故に其概要のみ記して、複雑の煩を免れんとす。其記事の粗雑なるを以て、歡迎の厚薄を速断せざらんを祈る。
 第二軍司令部の凱旋、第二軍司令官大山大將を始め、同司令部員井上少將・土岐軍醫總監・古川小田の兩大佐及び、荒川領事、其他將校同相當官、高等文官等、總て四十三名、下士卒二百一十一名と共に五月十八日午後三時、長門丸にて大連灣を發し、同廿日馬關を経て午後四時神戸に著し、兵庫常盤花壇に入る。此日周布兵庫縣知事・秋山同縣書記官等は、税關構内に迎ひ、港内碇泊の千代田・和泉・龍田の三艦よりは、禮砲を放ち道路歡迎者堵の如くなりし。而して同市軍隊歡迎會にては、大山大將を招待し、盛なる歡迎會を開かんと、其旨申出でしに、今回は第二軍司令部の歸朝したる途にて、軍隊の多數は今尙戦地に残れり。然るに、歸朝の早かりしが故に、戦地に在る軍隊に先ち歡迎を受けんと、中心大に安せざる所ありとて辭されけり。其勝て尙は驕らず、

他の將校士卒に同情を表するの邊、大將の重名をして、更に重きを加へしめたり。次いで全一行は、同月二十五日午後四時を以て無事京都七條停車場に著し、海軍樂隊の奏する樂聲囀々たるの裡に、大山大將には、大本營より差遣はされたる馬車に乗じ、騎兵數名に護衛せられて登營せり。此日土方宮内大臣は、勅旨を奉じ、香川皇后宮太夫は、皇后陛下の令旨を奉じて停車場に迎へ、其他小松宮殿下を始め奉り、伊藤・山縣・西郷の各大臣・大本營附文武官、渡邊京都府知事等、皆同場に出迎ひ、尙凱旋迎賀會員及、公私立各學校の職員生徒は、同場前より東本願寺の近傍に整列して、大將萬歳を唱へ、二十一發の煙火を打揚げて、大に之を祝したり。其後同大將には、大元帥陛下の御還幸に御供して東京に歸りける。

第一師團の凱旋 五月二十二日より、陸續大連灣を發し、凱旋の途に就きたる第一師團兵は、宇品及び、神戸港に於て、其消毒を終り、廿六日より次第に歸營せり。又山地球戰第一師團長一行は、五月廿六日宇品發、廣島より瀛軍に乗じ、山地中將及び、將校二名、下士二名は、神戸に下車し、歡迎聲裡兵庫常盤花壇に入り、其他は直に歸營の途に就けり。而して山地中將には、五月廿八日閑院宮殿下及び、野津大將一行と同伴して京都に着、全月廿九日午前十時四十分新橋着の瀛軍にて歸京したり。同停車場内外及び、沿道は午前八時過より、歡迎人山をなし、殊に麴町公會・日本橋鐵業組合・賣藥組合等は、各染抜きの大旗を押立歡迎し、留守師團兵は芝區二葉町より、久保町通兩側に並列して、一行を迎ふ。當日出迎の將校高官の重なる人々は、黒田樞密院議長、佐野・佐々木兩顧問官、芳川司法大臣、野崎・滋野の二中將・松岡・兒島・鈴木の三次官、園田總監・山根・佐野兩少將・佐々木伯爵夫人・山地中將夫人、其他將校等百餘名にして、中將の一步を移す毎に、場の内外充ち満てる數萬の群衆が、熱誠より發する萬歳の聲に迎へられ、出迎の馬車に

乗じて師團司令部に立寄り、間もなく歸宅せり。又此日頃よりして歸着し始めたる第一師團兵を迎へんが爲め、青山停車場は、日本橋有志團體、日本赤十字社員、南豊島・赤坂・四ッ谷等の有志團體及び、將校下士卒の親戚、故舊等群集して、列車の着する毎に、帝國萬歳、陸海軍萬歳を唱へ、其聲天地も震動せんばかりなり。

第二・第四・兩師團は、尙ほ遼東半島に留まりて、其守備に任じ、平和條約の擔保地たる威海衛及び、劉公島の守備は、第六師團の後發旅團を以て、混成旅團を組織して、其任に當れることなれり。

野戰第五師團は、六月廿四日復州着、七月廿日大連灣出帆にて、歸航の途に就く可き豫定なり。

第六師團の凱旋、野戰第六師團團長陸軍中將黒木爲楨氏は、參謀長歩兵大佐松村、務本、片山監督部長小島軍醫部長等將校及び、同相當官廿六名、下士卒百五十餘名、五月廿日大連灣出帆の威海丸に乗じ、廿四日午后四時三十分彦島に着し、檢疫を受けたる上、門司灣内に入り、商船會社の棧橋より上陸し、各設の旅館に入れり。門司灣内には、前夜來國旗球燈を掲げ、停車場前には、緑門を作り、港内の各船舶は、滿艦飾をなす等、歡迎の準備一方ならず、既にして威海丸着港するや、岩村福岡縣知事、緒方同縣書記官を始め、縣内各郡市長等、之を海上に迎へ、其他の有志者は、阜頭より旅館に至る迄の間に整列して之を歡迎せり。又師團長以下は、同夜同港に一泊の上、翌廿五日を以て、熊本に向け出發することとなりしを以て、各高等官等は、同夜急に宴を速門樓に設け、將校一同を饗し、馬關の有志者も、亦數艘の小蒸氣に乗じて、一行を歡迎せり。

其四海軍の凱旋

前日に豊島海上に戦つて、既に滿清四百餘州を呑むの勢を示し、敵膽を寒からしめ、我軍の海上の航行をして、大に安からしめ、威海衛を最も精緻に、巧妙に偵察して、陸軍の上陸、攻城進撃の偉勳を奏せしめ、渤海灣頭、濤怒り風荒きの所を犯して、鎮遠、定遠を捕獲し、北洋艦隊を塵滅せるもの、是れ我が艦隊の偉勳ならずや。幾多の智謀と、忍耐とが此間に用ひられしか、幾多の危険と困乏とは如何に彼等を見舞ひしか、懷うて茲に至れば、我等國民たるもの、大に感謝の意なくんばあらざるなり。而して平和克復と共に、陸軍隊の大部は既に凱旋して、其經歷をば各過去の歴史として物語りつゝ、ある間に、我海軍は主に南方炎熱の地に在りて、臺灣の征伐に備へつゝ、あるなり。我等今温帯の地に在りて、美酒佳肴の間に其日を送るも、遠く南方を眺むれば、夫れ斯くの如く勞するの軍士あるなり。我等は、如何なる厚禮實意を以てするも、尙ほ謝するに足らざるを深く恨むなり。而して其征清中、我聯合艦隊司令長官として、能く今日の偉功を奏するを得せしめたる伊東海軍中將には、軍艦松島にて、他の將校と共に神戸港に上陸したりければ、我國民の至誠忠實なる所、發して歡迎會となり、慰勞會となり、各地到る處に開かる。是れ國民が肺腑より出でたる、海軍に對する熱情愛敬心なり。

伊東中將が、上陸して薩摩屋に投宿せるは、五月十一日のことにして、後十三日には、神戸市の官民有志者大に會して、同中將及び松島乗組士官の慰勞會を、兵庫常盤に開く。其盛況んや、出席二百餘名に上れるを見て推す可きなり。是れ國民が海軍の勞を謝せんとする一片の熱血なり。次いで同中將が、京都に着するや、遂に陸軍隊に對する歡迎に異なるなく、到る處歡迎優待せられざるなし。後五月十八日には、京都祇園中村樓に於て、頗る盛大なる慰勞會は開かれたり。其席に列れる者、伊藤總理大臣・松方・西郷・土方の三大臣を始めとして、大本營附各高等文武官及び、

有志者等にして、第四回内閣勸業博覽會副總裁九鬼隆一氏、立つて慰勞文を朗讀し、其功勞を謝し、苦を慰め、次いで伊東中將立ちて之が答辭を述べ、終りて盛大なる宴會を開き、午後十一時に及びたり。

各地祝捷會實況

國民が赤誠を盡し、眞情を盡して、平和條約の締結を祝し、軍隊の凱旋を歓迎するの美舉、各地到處見ざるなく、聞かざるなし。是れ國民一般が、専心平和を希ひ、軍隊を愛し、其勞を謝する所より出たる舉にして、以て如何に國民が激愾心に富み、愛國奉公心に豊かなるを見る可きなり。大坂の祝和會、五月廿一日、同市に於ける實業家二百餘名は、大坂ホテルに於て、在京都各大臣等を招き、平和祝賀會を催し、同六時十五分樂隊奏樂聲裡に立食の饗應あり。山田府知事の祝詞、伊藤總理大臣・山縣陸軍大臣・西郷海軍大臣・末松謙澄氏の演説あり、終りて數番の餘興ありて後、九時全く散會す。當日出席者は、伊藤總理大臣・山縣・松方・西郷・土方の各大臣及び、岡澤中將・山本少將・眞鍋大佐等なりし。千葉縣野田町の祝和會、野田町有志者は、五月十五日を以て祝賀會を開きしに、當日午前八時頃より各村の團體、思ひ／＼の旗幟を押立て、隊伍整々東正寺境内に集合し、其より學校生徒七百名を先に立て、神官軍人家族等、凡二千餘名之に従ひ、式場なる愛宕神社内に着し、式を舉げ終て宴會に移りたり。各戸皆國旗を掲げ、赤誠を盡して祝賀の意を表し、更に大本營に宛、平和克復の祝電を發する等、極めて盛會なりし。京都の祝捷會、京都市有志者の發起に係る、皇軍凱旋祝賀會は、五月廿五日午後二時より御苑

内に於て開かれたり。來會の官民無慮二万五千餘名、皆摸擬士官帽を被り、二百餘名の婦人會員は、聯隊旗、軍艦旗を付けたる、牡丹の花釵を挿し、式場に整列せり。先づ會員總代渡邊京都府知事の祝辭あり、了りて一同 大元帥陛下萬歲、陸海軍萬歲を唱へたる聲は、天地も崩る、許りな式を行ふ際には、小松宮殿下は、建禮門前に於て馬に召され、土方宮内大臣・各將校・侍從等と之を御覽せられ、夫れより會員一同は七條停車場に至り、大山第二軍司令官の來着を迎へ、轉じて圓山公園に至りて、祝宴を張り、二十一發の祝砲を放ち、種々の餘興の後、散會す。非常の盛會なりし。

神戸の祝和會、五月二十日、神戸港川に開きたる祝和會には、來會者二千餘名にして、周布兵庫縣知事代理として、秋山同縣書記官祝文を朗讀して、會員一同 大元帥陛下萬歲を三呼し、其れより酒宴を開き、各充分の歡を盡して散會す。此日市中は國旗球燈を掲げて祝意を表したり。岩手縣の祝捷會、盛岡市・東中北閉伊・三郡・二戸郡・西磐井郡・西閉伊郡・氣仙郡・稗貫・東西和賀三郡・膽澤・江刺二郡・南北九戸二郡等は、五月三十日 大元帥陛下 御還幸の日をトして、官民打揃ひ、頗る盛大なる凱旋祝賀會を開き、各戸國旗を掲げ、烟花手踊擊劍等の催しあり、來會者、何れも數千名に上れり。以て如何に地方人士が、凱旋を祝賀しつゝ、あるかを見るべし。青森の祝捷會、大元帥陛下の御凱旋を祝し奉らんが爲め、青森市に於ては、米穀取引所主唱となり、同所員及び、仲買人其他有志者打集ひ、五月三十日青森公園に於て大祝宴を開き、尙ほ加之紀念に残さん爲め、同公園内に數多の櫻樹を植ゑたり。

大坂の祝捷會、大坂市の有志者は、先きに祝和會を開き、五月七日再び、祝捷會を開く。朝來天氣晴朗にして、發起人以下來會者は、無慮一万五千餘人あり。諸官衙・會社・銀行等、其他の各團

體は、何れも休業し、諸種の餘興等ありて、頗る盛況、又漸次戦地より歸着の軍隊に對しても、歡迎非常に盛にして、市中各商店は皆休業したり。

福岡市の祝捷會、福岡市に於ては、五月十三日、頗る盛大なる凱旋祝賀式を舉行し、種々の催しあり、又各戸國旗を掲げ、業を休みて、大に祝したり。

札幌市の祝捷會、札幌にては、五月十三日參會者一千餘名を以て、頗る盛大なる凱旋祝賀會を開き、諸種の催しありたり。

第三高等學校の祝和會、同校に於ては、五月廿二日、小松總督宮殿下京都へ凱旋の日を卜して、平和克復祝賀會を催し、午前十時職員生徒一同式場に整して君が代を三唱し、祝詞等ありて、兩陛下並に陸海軍の萬歳を三唱し、同運動場に出て分列式を行ひ、二十一發の祝砲を放ち、午後二時過より、武裝して七條停車場に至り、小松總督宮殿下を奉迎せり。

北海道に於ける祝和會、全道到處に舉行せられ、札幌・函館・小樽・室蘭・江差・根室等皆凡そ一千名以上の參會者を見るを以て、其一般の思想を伺ふに足る可し。

其他新潟に・伊香保に・徳島に・淡路に、至る所に最も盛況を以て開かれ、又未だ開かれざる所は、次第に開かれんと計畫奔走中に在れば、不日更に盛大なるの祝典の舉行せらるゝを見るなる可し。殊に東京に於ては秋冷を待ち、臺灣鎮定と同時に、大祝賀凱旋會を舉行せんと、準備既に整ひたり。

在布哇日本人の大祝捷會、ホノル、市在日本人は、五月十一日を以て祝捷會を開けり。當日領事館の門前には、凱旋門を造り、帝國國旗を交叉し、又其内外には、球燈花卉を飾付たり。有志者は、豫て軍裝・軍旗・砲車・軍艦を模造し、又將校士卒等、夫れく役割を定め、布哇政府の樂隊

を備ひ、午前八時より隊伍整々、旗鼓堂々市街を進行したる時は、滿都士女堵の如く群集し、歡呼の聲、暫しは鳴も止まず、斯くして領事館に至り、聖影を拜し終りて一同はインデペンデント、パークの祝典場に進行す。場の入口には、大なる凱旋門を設け、球燈花卉等の裝飾壯麗を極め、同市未曾有の壯觀なりし。午后三時祝式を終へ、餘興に移り、相撲擊劔打球等を演じ、煙火は晝夜絶えず打揚げ、日没後は、幻燈狂言等を加へたり。最後に擬軍隊は、各自球燈を携へ市の中心なるフォルトキング街に至り、樂隊は『君が代』を奏し、一同萬歳を三呼して退散したるは、午後十時頃なりき。尙ほ布哇諸島各耕地在留者も追々相謀りて祝捷會を催す筈なりと云ふ。其他海外在留本邦人は、何れも遙に凱旋を祝して、賀會の催しあらざるなし。

臺灣誌

全島地誌

一國の防備は一家に於けるが如く、必ず完全なる門戸と、鎖鑰の具備するを要す。北海道と、千島群島、是れ實に國民の腦裡に記銘せる帝國北門の關塞なりと而かも、南方沖繩の一面、古來完全の門扉を斂き、防禦に幾多の不完を感せしもの多時、今や征清の一役、天幸に我に臺灣を恵み、澎湖を賜ひ、以て天成の鎖鑰を守らしむ。之を兵備の上の間へば、東洋の正中に蟠居して、南進北征の咽喉に當る。之を商業の上の間へば、地味豊饒にして、物産豊かに、南香港を据ゑて南洋に通じ、西上海に接して、支那貿易の中樞に位す。若し巧みに拓殖して、其荒蕪を開かば、優に帝國の南鎮たるべく、殖産的實利も亦圖るべからざらんとす、臺灣真に貴重の海島なり。

此地沖繩の入表島及、與那國島を去る、僅かに數拾海里の西に在り。東經百二十度拾五分より、百二十度四分に至り、北緯二十一度五十三分より、二十五度六分に達し、東海第一の大島となす。地勢北より南に蜿蜒し、南北長二百三十英里、東西の幅七十〇英里乃至、八十英里に達し、面積壹萬四千九百八十二方里を有し、人口大約三百萬を算す。西百里を隔て、支那本部に面し、其間一の海峡を爲す、之を臺灣海峡、即ちフォルモサ、チャンチルと稱す。歐人の臺灣を呼ぶに、必ずフォルモサを稱す。其語美麗を意味し、本と葡萄牙語に屬す。彼等の初めて島に上り、其の鬱乎たる山林、翠蒼たる平野を見るに及び、思らく豊穰極まりなしと。乃ち名するに此名を以てす。蓋し在昔本邦人が高砂の別名を此島に冠せしと、殆んど同一の思想に出づ。山紫綠水の明媚も、亦

位置

地勢

山脈

以て想ふに足る。
 島の中央を南北に走る一鏈の山脈あり。地勢自ら東西二部に分る、東部は峻嶒峩々として鬱蒼たる深林を以て蔽はれ、山嶽重疊して全く未開の蕃地に屬すと雖も、西部は之に反し、地平かに野肥々、多年支那人の手に依りて、開拓せられ、間々四十方英里の平原を見る。
 臺灣に就き完全なる地理學を攻究すべき材料を缺くは、最も遺憾とする所なり。今や新に帝國の版圖に入り去と雖も、其以前に在りては、千八百八十五年ホツキン氏の視察報告及、耶蘇宣教師の實見、其他我某々の調査せる二三に據るの外なし。北部の山層は、火山脈を横成し、漸次南に走りて、島の中央に至り、遂にモリソン（壹萬貳千八百五十呎）及び、シルバー（壹萬千三百呎）、一名シルウィヤ山に達して、其最高を極め、是より一起一伏して、以て島の南端を極む。極南一帯の地は、殆んど牡蠣を含有せる珊瑚石灰質と、粘土砂石を混合せる地層を以て成立し、表面恰も刀及の如く鋸齒狀を爲し、險惡最も歩行に難く、若くは獸類と雖も通行すべからざる處ある。間々珊瑚質層の山頂二十呎の高地に点在するを以て見れば、臺灣南部は昔時全く海底の一地層たりし、年次隆起して、以て今日に至りしものたるや、明白の事實なるもの、如し。然れども、北部一帯の地、例之は臺北府附近の如きは、全く之に反し、昔時一大沼湖たりしが、淡水河の西岸に登依りて、全く湖底を填塞せられ、今日の一大平原を描成せるものとす。故に此地方に在りては、地下六十呎の深處に於て、具殼及朽木を混する青色粘土を見る。左れば噴水井の如き、殆んど二百呎の深處を爲さざるよりは、到底得べからざるとありと言ふ。嘗て大稻埕に一井を穿ちたる時、百六十四呎の地下に達し、初めて清良なる水質を得たるを實測せり。北部の火山中、最も著

東海岸

四海岸

川流

港灣

名なるものを紗帽山ト稱す。千八百八十一年、淡水海關の測量に據れば、山高三千六百五十尺にして、凡そ三千尺の處に於て、盛に硫黃氣を噴出し、其響音數里の外に聞え、近傍六ヶ所に温泉を涌出すと言ふ。淡水河岸の地は、重に火燄石質を以て形成せられ、時々強地震を感ずるとあり。殊に其右岸は、砂礫雜土の結合堆積したる地層にして、高水標より十二呎乃至十五呎の所に於て、二呎乃至三呎の土壤を支へ、且つ多く炭質の沈澱物を存す。
 臺灣の東海岸五分の三は、峻崖絶壁を以て參差し、海潮常に其岸に湍翻し、毫も船舶停繫の利なし。唯ドム岬角の北蘇澳灣以北より、三貂角を廻り、基隆港に達する海岸線は、僅かに船舶の便あり。此の中部嶮岸の海岸線に沿ひ、四條の無名江口に於て、奇萊・補坡蘭・黒石・サニー・バア等の湊灣ありと雖も、寧ろ漁舟の繫留場たるに過ぎず、到底漁船を入るゝに足らず、之に反し、西海岸は、一帯盡く泥灘にして、概ね淺淤を爲し、海岸數哩の外に至るにあらざれば、十尋以上の深所を見出すと甚だ難し。蓋し西部の平原は、大小の河流常に泥土を洗滌し、若くは所在に汎濫して、皆島の西方海に注ぎ、自然に沈澱物を堆積せしむるに由る。凡べて臺灣の水流は源を中央の山脈に發し、東西に分流す。其西に流るゝものは、大甲河・水砂連・東螺河・柴溪等を以て、最も大なりとす。然ども河流の延長二十里に達する者なく、舟筏の便甚だ薄し。淡水河は、源をタンゴウ山脈に發し、一は山西を流れて、大姑陷川となり、一は山東を廻つてシンチャム川と稱し、共に北流して、猛舄より滬尾に至り、相會して臺北府を過ぎ、北の方淡水港に注ぐ。猛舄より滬尾に至る其間九哩、僅かに小汽船を通ずるに足る。其一大分流は、即ち鷓鴣河なり、江口を基隆湊となす。其他西海岸に在りて、馬鎖港・麥寮港・布袋嘴港・鹿港・笨港・東港・風港・琅璠港等の小港少なからずと雖も、皆小形なる支那船の碇泊に便するに過ぎず。到底巨舶を入るゝ能はず、此等の港灣

基隆

中、鹿港は清佛戦争の際、臺灣諸港の封鎖せらるゝに當り、僅かに其難を免れ、支那本部の通信を爲したるの地にして、今即ち安平港を開いて之に代へり。琅瑤港は、即ち明治七年征臺の役、西郷都督の上陸せる要港なり。總べて臺灣の諸港は、東北定期風の時は、安全の碇泊場たるべしと雖も、西南の定期風至るに及べば、危嶮特に甚だしく、基隆、打狗の良港と雖も、問々其の安全を保つ能はず、今基隆・淡水・安平・打狗の四港に就き、更らに其詳細を記せん。

基隆一に鷓籠と稱し、人口大約七萬を數へ、臺灣の北海岸に在り。長崎より六百三拾七海里、上海より三百七十六海里、福州より百五十海里、厦門より二百三十五海里を距つ、三面皆山を環らし、北面僅かに海に瀕す。瀕海の諸山、多くは斷崖絶壁にして、犬牙相噛み、地勢諸所に斷絶して、戦時最も形勝の地たり。明治十七年清佛戦争の際、清軍此處に據り、數々佛軍を苦めたりしが、遂に其陥落する所となり、其の防禦工事は、全く佛人の爲めに破壊せらる。今の西樓山砲臺及び、海關東方に在る山上の砲臺等は、皆其後に經營せるものに係る。港口水深くして、數隻の巨艦を繫泊し得べしと雖も、潮流極めて急激にして、風浪起らざる時に在りても、小形の船舶は、間々破壊没の難を蒙るとあり。殊に東北の颶風を避くる能はざるが爲めに、彌々良港たるの資格に於いて、間然する處なき能はずと雖も、石炭の輸出極めて多く、電信鐵道の設け、又全く備はり、淡水と優に、臺灣有數の良港と稱さる。

淡水港

淡水港は、淡水河口に在り、港内水淺く、軍艦の溯るを許さず。福州を去る百三十七海里、厦門を距つと二百〇三海里となす。臺灣西海岸に面し、基隆の西方に位す、人口大約十萬を算し、市街は淡水河口の北岸砂洲を距る、大約一里の處にありて、殆んど臺灣の主腦たり。四坐の砲臺と、水雷營とに依りて、海面を防禦し、嘗て佛國艦隊の砲撃を蒙れども、陥らざりしと言ふ。千八百

安平港

五十八年、始めて貿易港となりてより、専ら茶及び樟腦を輸出し、以て今日に至る。

安平港は、臺南府の咽喉にして、其西方大約一里に位し、最近開始の貿易港たり。故を以て、戶數僅かに四百、人口二千に過ぎず。未だ繁盛の域に達せずと雖も、漸次輸出入の數を増加し、殆んど打狗港の隆衰と逆比例を爲すの進運に向へり。稻米・砂糖・芝麻・茯苓・樟腦等を主要の産物と爲す。此地長崎を去る八百七十里、香港に至る三百海里、厦門に百八十里、上海に六百五十海里を隔つ。海面砂洲多く、波浪常に揚りて、殊に西南定期風を避くる能はず。繫泊素より便ならずと雖も、臺南府運輸の便最も開け、近時又運河の開鑿せられてより、益々重要な交貿場たるに至れり。

打狗

打狗、一名旗後と云ふ。安平港の南方大約十五里に在り。海底多く砂礫を沈澱し、大艦巨船と入るに由なしと雖も、港内廣くして、風浪の難なく、地形最も自然の便を備ふ。不幸にして、多年自然の成行に放擲し、漸く衰頹の兆ありと雖も、若し更らに浚渫の工事を施さば、數十の船隻の安全に港内に寄泊するを得べく、従つて臺灣唯一の良港たるに至らん。北岸は所謂打狗山高嶮立し、南岸はサラゼン頭の峻崖、遠く灣を擁して海中に屈出す。

澎湖羣島

以上の四港を臺灣の貿易港と爲す。尙東岸に一の蘇澳灣あり。基隆の南大約六十里の處に位し、蕃地と境を接す。此地未だ開港場たらずと雖も、水深くして後日最も有望の地たり。灣内更らに二小灣を有し、南をランホンホと言ひ、南東をバクホンホと名づく。

臺灣は、實に東洋の關門なり。而かも其死命を握り、臺灣の門戸を爲すものを澎湖羣島とす。島は支那本部と臺灣の中間に位し、北緯二十三度十二分より、二十三度四十七分、東經百十九度十九分より、百十九度四十一分の間、點在せる五十有五の小島より成り、厦門を去る三百清里、臺

澎湖

南府(臺灣の首府)を去る百七十五清里に位す。其中主なる者を澎湖・白沙・漁翁の三島となし、三島相擁して中間に一大良灣を形成す。即ち澎湖灣なり。灣内水深くして廣潤に、克く三十餘艘の大艦を入るへし。臺灣の咽喉となり、其死命を握ると云ふもの、蓋し此の一大良港あるが爲めなり。古來臺灣の歴史を按ずるに、日本邊民の支那沿岸に寇し、臺灣を領有せるものも、鄭成功の厦門を去りて、威を臺灣に奮ひし時も、清國の鄭氏を滅するの時も、將九佛の提督クルベ一氏の臺灣に臨み、征清役の南進せる時も、凡て先づ澎湖を取つて、其本據を据ゑたり、澎湖の臺灣に於ける位置の重要な、洵に此の如し。

五十五島中、住民の居住せるもの二十有三、人口凡べて八万と稱す。最も大なるを澎湖島とし、南北殆んど九哩、周回四十八英里あり。一名大山島と稱す。西南の市府を媽宮と名つけ、戸數七八百を有し、島廳を設く。地勢灣入して、自ら別に一灣を開き、干潮の時尙容易に巨艦を泊せしむべし。即ち媽宮港なり。

灣を隔て、西三英里にあるものを漁翁島となす。周回十八英里、其の南端に頭巾灣あり、二島の北方に位するものは、則ち白沙島なり。澎湖灣の西南端と、北邊に二支灣あり、南を馬公港と云ひ、北を大倉灣と名く。澎湖列島は、赤土にして一樹を生せず、尤も飲水に乏し。然れども若し樹木を培養するならば、數年ならずして、能く鬱林蒼叢を爲すべしと云ふ。此地今現に帝國艦隊の本據地となり、陸上は第六師團の一部に依りて守備せらる。

支那本部と、臺灣との連絡は、福州府、淡水港間に沈設せる百一十一英里の海底電線にして、澎湖島とは、安平港より同じく一條の海底線を沈設せり。電信局設置の市府は、北の方基隆に初まり、淡水・臺北・臺南・安平・打狗・澎湖となす。各地又郵便の制を布く、鐵道は基隆新竹間に敷設せら

海底電線

鐵道

れ、單線狹軌の制を取る、獨乙商社の手に取りて起工し、明治廿四年を以て開通せられ、臺北・錫口・南港・水返却・八堵・依仔口・大稻・埕橋・新庄・卓角に各停車場を設く。然れども工事甚だ粗雑にして、軌道は殆んど平田と其高を等し、霖雨少しく降れば、危險殆んど言ふべからず、且つ軌道の高低彎曲常なく、毎回の列車漸く二三輛を輸するに過ぎず、到底未だ實利を見るに足らず、所謂鐵道の小摸型と言ふべきのみ、以上運輸交通の便は、總べて明治二十年以來、巡撫劉銘傳の經營に係るものなりと云ふ。

氣候

臺灣の氣候は、甚だ溫暖なれども、山嶽高嶺其半部を覆ひ、森林綠叢四時絶ゆるの期なきが爲めに一般世人の想像するが如く激甚ならず。且つ夏季と雖も敢へて健康を害するに及ばず、冬季は高山の頂上に白雪を頂くと見るとあり。夏季は、炎熱間九十八九度に達すと雖も、山上より吹き送る冷風は、大に暑氣を減削し、夜中は却つて爽快を感ずると尙日本内地に於けると大差なし。今明治二十年より同廿四年に亘る五ヶ年間、寒暑の統計を見るに、暑氣は八月に於いて最も甚だしく、其最高平均九十六度、八(七月は九十六度、七)に達し、明治二十一年八月に於いて百度に達せしものを除くの外は、毎歲最高暑の日と雖も九十三四度を過ぎず。冬季は、一月二月を最寒とし、平均四十五度乃至、四十五度、二を示す。而して寒暖計の最低を示せしは、同じく廿一年に於いて、曾つて一日四十度に降りしとありしのみ。他は通常五十度内外を昇降せり。故に壯者は、往々單衣を以て冬季を越年するとあり。春夏は降雨少なし雖も、秋冬二季に至れば、霖雨多く、或は數日に亘り、且つ降霧數々至る、一日の中、陰晴殆んど常ならず、若し東北定期風の起るれば、砂塵天を覆ひ、殆んど外出に難し。東岸の地殊に然りとす。

臺灣沿革史

支那の關

臺灣の地は、本と海上の一孤島なり。其の世に知られずして、長く歴史を有せざりしもの、怪むに足らず。僅かに口碑に傳はり、且つ歴史に上るべきものは、實に十六世紀以後の事に屬す。其初めて史に散見せしは、隋の大業年中、羽騎尉を澎湖に入らしめたりと記せるものにして、元末初めて此地に巡檢司を設けたりと云ふ。而かも臺灣本島を略有したるものは、支那人其人にあらずして、却つて日本人なることを愉快なれ。今其史を按ずるに。

本邦の關

我戰國時代の頃、伊豫の河野、村上の諸氏、四國・山陽・九州沿岸の民を叫合し、之が魁首となり、船艦數百艘を率ゐて、臺灣に至り、鷓籠を取り、澎湖を略し、以て其本據を定め、支那の南岸を侵せり。史乘の所謂倭寇なるものは、則ち此の邊民の一群にして、其船艦は、八幡船と稱し、尤も支那人に威懾せられたりと云ふ。當時彼等の勢力は、遠く呂宋以南の諸島に達し、各地の島民盡く其威力の下に屈服せり。

和蘭の關

其後幾何ならず、彼等が餘義なき本國の事情に迫られ、其の大艦隊を纏めて歸帆するに及び、久しく垂涎せる和蘭人は、忽ち其機に乗じ、支那海上の全權を握つて澎湖と、臺灣とを合せて占有せり。

葡商の關

歐洲人の初めて、臺灣に上陸せしものは、葡萄牙人にして、千五百九十年に當りては、既に鷓籠に居住したるもの、如し。當時西班牙人は、非津賓群島に、葡萄牙人は廣東省の澳門に、各殖民地を開き、盛に交易に従事せしかば、千六百二十四年に至り、和蘭人は遂に其刺激を蒙つて、澎湖を占領し、前兩者と競争を試み、更らに又鷓籠に上陸し、遂に西葡兩國人を驅逐し、三十有五年間、其武威を振へり。

日本甲螺

我が戰國時代より延いて、豊臣氏の頃に至り、臺灣の北部より、海岸を沿うて南に下る一帶の野原は全く我が邊民の占領する所となり、蘭人の如き、元和の頃に於いては、毎歲鹿皮三萬枚を容れて、其の歡心を買へり。然れども、徳川氏の鎖國主義は、端なく此等の邊民を制肘し、遂に蘭人をして此地を奪ひ、赤嵌(ゼラング)城を築き砲臺を設け、恣に海上の權を專領せしめき。次いで慶長八年、(萬曆三十一年)に至り、遂に澎湖を取り、西の方支那に向つて互市を要請するに至らしめき。左れど支那人の狡猾ある、蘭人を欺いて澎湖の城砦を毀たしめ、遂に其交易を許さざりしかば、爰に蘭人の怒を招き、遂に又兵を以て相見るに至り、多年支那海上に海戰を見るに至れり。後ち我寛永元年に至り、巡撫南居益あり、蘭人を破り、澎湖を復せしが、未だ其力を本島に波及する能はざりき。此の前後に在りて、海盜顏思齊、陳衷紀の輩、又我が邊民を集め、海上を掠め、臺灣の各地を據有せり。之を要するに、元明時代に在りて、臺灣は全く海盜の根據地となり、毫も支那領たるの實なかりき。而かも其島主は、所謂日本甲螺にてありき。甲螺中間々支那人種を混せしものありしと雖も、而かも其實日本に歸化せし心を以て、部下を制御するにあらずんば、到底其權力を維持する能はざりしと、愉快なる。彼の有名なる濱田彌兵衛が蘭人を屈服せしも亦此時代に當れり。

思齊の死するや、部下鄭芝龍なるものあり、代つて衆を領し、其掠むる所を以て、蘭人と交易す。芝龍嘗て落魄して、我が肥前の平戸に來り、田川氏を娶り、男兒を擧ぐ、即ち成功なり。芝龍臺灣に據り、漸く其勢力を得るに及んで、欸を明の總督熊文傑に容れ、封せられて遊擊となり、後ち累進して副總兵に進む。明祚の漸く傾くに及び、芝龍其時ふる所を散し、徒を集めて數萬を得、更らに進んで大艦隊を組織し、清人に抗敵し、最も其忌憚する所となる。福王の江南に

移るや、太師平國公に封せられて、正總兵となりしが、此頃よりして、首鼠兩端を持して、遂に清に降り、其封を受け、同安侯の爵を以て、北京に入朝し、後復南歸せず。
芝龍降るの時、子成功年正に二拾、咨嗟浩歎、直ちに門を辭し、舍弟製合以下十八人を率ゐて、厦門に航し、漸く其徒を叫合して、此地を保ち、以て清軍に抗す。成功常に間諜を内地に派遣し、能く敵情を詳知し、其兵を操縱せしが故に、守る處彈丸墨子の地に留まりしと雖も、終に事を敗るに至らず、漸次其兵力を増大にし、且つ清氏通洋の禁は、彼をして縦に海上の霸權を掌握せしめて、益々財用を富祐ならしめたり。乃ち我が明曆三年（順治十三年）、戰艦三千餘艘水陸十五萬の兵を率ゐて江南を侵し、後ち三年復た京口に入りて、江寧を破りし等、兵勢甚だ盛なりしが、中途謀沮み空しく厦門に歸り、退守するの止むべからざるに至れり。
此時に當り、臺灣の地、蘭人の跋扈を蒙り、各日本甲螺等、漸く其勢力を萎墜す。甲螺、乃ち厦門に來つて成功を説くものあるに會す。成功、依て急に策を變じ、臺灣を略有して、其本據となすに決す。當時蘭人其勢力を頼み、且つ明清大陸の戰塵、到底此地に波及せざるを信じ、毫も警備を加へず、成功窈かに以て乘すべしと爲し、急に兵艦數千を繕して、澎湖を陥れ、更らに南進して臺灣に迫り、鹿耳門に次し、赤崁に向ふ。蘭人城に嬰りて死守し、能く巨砲を射ち、敢て降らず。一日成功策を盡し、乾草油硝を小舟數隻に滿載し、東北風に乗じて火を放ち、蘭船に衝突せしめ、其數大艦を燒撃す。是より蘭人、漸く魄を奪はれ、遂に城を致して去り、鄭氏初めて臺灣を據守す。實に西曆千六百六十二年なり。

成功、乃ち全島を改めて東都と稱し、臺灣府（今の臺南府）を承天府と名け、領土を天興、萬年の二縣に分割し、赤崁城を改め、安平鎮と爲し、宮殿衙門を新營し、大に政教を布き、賞罰を嚴明にす。是より臺灣の地、初めて主權の存在を認むるに至れり。其他尙西班牙人の築ける鷓籠砲臺及び、蘭人の作れる淡水の砲臺を改めて、益々其守備を嚴にし、以て滿清に抗し、僅かに明末の正朔を此地に保持しき。

成功年三十有九にして没し、子鄭經嗣立し、東都を改めて東寧となす。經資性文雅殆んど武事に長せず、爲めに乃父の計畫遂に進暢するに由なく、將卒稍離叛するものあり。即ち大に船艦を修理し、清の叛將福建王の事を以て、相讎るものを討ち、大に之を破る。而かも爾他遂に録々記すべきの異事なく、我天和元年（清の康熙二十年）を以て、病歿し、子克塽嗣立す。尙幼にして國事を見る能はざるを以て、臺灣の事、皆補臣劉國軒の統理する所たり。

清の官吏姚啓清の福建總督に任せらるゝや、大に寬典を定めて、在臺の鄭兵を招降す。是に於いて臺民相率ゐて清政府に歸降し、鄭氏政大に衰ふ。姚機を察し、提督施琅と謀り、兵を發して澎湖を襲ひ、遂に之を陥る。克塽依つて施琅によりて降を乞ひ、遂に北京に送られ、後ち漢軍公に封らる。是より施琅臺民を接撫し、初めて清國の版圖に入る。即ち康熙二十四年なり。

臺灣の清國領に屬して、史乘の記すべきものなし、唯康熙三十五年東田尾の人、英球なるもの、朱祐龍と謀り、明帝の後裔なりと稱し、乱を謀りて誅に伏せしとあり、後ち康熙六十年、南路の賊翁飛虎、又朱祖なるものを奉じ、稱して朱一貴と號し、先づ臺灣應を陥れ、勢全島に震ふ。然れども其旗下奥黨、閩黨の二派に分れ相軋するに及び、總督覺羅滿の乘する所となり、遂に敗滅す。其他黃教の乱（乾隆三十五年）、林爽文の乱（乾隆五十年）等、叛乱常ならず、以て最近二十年前に及ぶ。明治七年終に我征臺軍の南部臺灣を討服するに至り、恒春縣及び琅瑤一帶の地方、悉く我征服する所となる、明治十七年、清佛葛藤の破裂するや、佛國艦隊、又澎湖を陥れて、本據とな

し、打狗・淡水・鷓籠の各港を砲撃し、最も臺灣を奪取せんと謀る。是れより、清廷漸く臺地の忽諸に附すべからざるを悟り、翌年福建省直轄の制を改めて、新に獨立の一省となし、劉銘傳を起して巡撫に任じ、同島に駐在せしむ。銘傳乃ち精を勵まし、治を謀り、財政を整理し、金穀を貯へ、以て緩急變に應ずるの策を定め、府縣を設け、鐵道・電信・郵便、其他必要なる會社を創設す、明治十九年、更らに精しく地を檢して、地租の制を明にし、從來僅かに收入し得たる拾八萬三千三百六十六兩の地租税は、明治二十二年に至りては、増して六拾七萬四千四百六拾八兩の多額に達せりと云ふ。

府縣地理

臺灣地誌を詳細に記述せんことは、甚だ困難にして、今日に在りては殆んど其材料を見出す能はず。止むなくんば、唯明治二十年巡撫劉銘傳が創擬せる建治に基き、臺北・臺南・臺灣の三府及び其下に分隸せる十一縣三廳、并に一州(臺東州)に就き、各別に編述するの外なし。然れども今や我版圖に歸せし上は強て舊府縣誌をものするを要せんや。詳は他日鎮定整制の日を待て、更に記るすべく、今は唯其大要を擧ぐべし。

〔臺北府〕は、淡水河の上流八哩の右岸にありて、臺灣巡撫の駐劄せし地なり、淡水、基隆の二港を有す。四面皆山巒を繞らし、最も高さものは殆んど二千尺に上り、其距離、東北の兩面は僅かに一二里に過ぎず。唯南方は、漸く遠く三四里に至り、西は更らに六里を距つ。中間は、則ち一小平坦地にして、最も水田に富めり。土質粘土にして、樹木に乏しと雖も、平地は到る所に竹叢を生じ、山地は亂草灌木雜木を生ず。府城は、支那築城法に據り、輓近築さしものに係り、石を壘

臺北府

み、厚さ二間、高三間餘の城壁を繞らし、南方に二門、東西北各一門を開通せり。城内官署あり、兵營あり、軍機局あり、鐵路局あり。其他火藥廠、汽車工廠、槍子工廠、軍械局等盡く備はらざるなし。又文廟、武廟、天后宮と稱する壯麗なる三大廟あり、最も人目を惹く。市街は規模宏大にして、他の支那街の如く不淨ならず、道路亦平坦にして二間乃至六間に至り、人道を通ず、城内三分二は、家屋相櫛比すと雖も、新開の地なるを以て、他は今尙水田に屬せり。夜間は五六坐の電燈を照す等、稍々上海の風あり。北門外五丁を隔て、淡水河岸に千五六百戸の市街あり、商船の繫泊場たり。大稻埕と稱し、商業貿易の主場となす、之より淡水河を下れば、滬尾八里坌に達すべく、西岸には中壢・茄冬・南崁・橫溪、八里坌等の小湊あり。

滬尾港

滬尾港は、臺北府の北五里、淡水河口の良港にして、戸數千餘、常に三四の汽船と、數十の支那船を繫泊す。背面山を繞らし、前面河を扣へ、緩く海に面し、砲臺あり、以て其守備に供ふ。

淡水縣

淡水縣は、艇舫に在り。臺北市は、臺北府を距る僅かに一里、淡水河の左岸にあり、戸數二千餘、商店櫛比して、街衢陋穢に、頗る熱鬧を極む。即ち舊瑪口(繫泊地)なり。

新竹縣

新竹縣は、臺北府城の最南部を管轄し、新竹市にあり。人口四千五百、臺灣鐵道の終点なり。明治十一年、初めて縣を置く、管内土地肥沃にして、山を負ひ東に瀕し、吞霄・後龍・中港・香山の諸港あり。皆同名溪流の江口にありて、小船を泊せしむ。

宜蘭縣

宜蘭縣は、臺北府管下に屬し、北部臺灣に於ける東海岸一帯の地を直轄し、南は蘇澳より、北は三貂を限る。千八百年代にありては、全く蠻地に屬せしが、漳州人吳沙なるもの、此に移住して會長となりてより、漸次開拓せられ、明治十一年遂に宜蘭縣を設置せり。人口凡そ六千。

基隆廳

淡水、宜蘭、新竹三縣の外、更らに基隆廳ありて、臺北府、營に屬す。基隆は、臺北を距る凡九里、滬

臺灣府

臺南府

安平縣

鳳山縣

恒春縣

紅頭嶼

火燒嶼

嘉義縣

官話

頭髮

尾より海上約二十五海里の東方に在り。港の灣入すると二里餘にして、其南端に市街あり、戸數大約八百を數ふ。(港灣の部に詳なり)。

〔臺灣府〕は、中部臺灣を管轄し、臺灣縣・彰化縣・雲林縣・苗栗縣、及捕裏廳に分管す、彰化縣は、新竹縣に隣りし土地豊饒にして、管内總べて一大平原を爲し、虎尾・寶斗・大肚・大甲、等の溪流、皆源を東山に發して、此平野を貫流し、以て灌溉に便す。海口には、麥寮・番寮・鹿港・梧棲等の諸港あり。就中鹿港は、商賈輻湊して、貿易最も繁盛に、且つ支那本部に達する要港たり。

〔臺南府〕は、則ち舊臺灣府にして、南部全体を管轄し、治下を安平縣・鳳山縣・嘉義縣・恒春縣となす。

臺南府の四面は、地域狹窄にして、地味豊饒ならず、沙土を混す。故を以て、却つて甘蔗の培養に適し、以て主要の産物となす。府城は、石城にして、千六百三十年蘭人の建築に係り、方大約六千米突、高六米乃至七米、厚四米突の小礮石牆壁を巡らし、八個の樓門を設け、人口大約十三万五千と稱す。

安平縣は、臺南府の負郭にして、西方一里の海港なり、人口千有五百を有し、海關を設け、貿易港たり。本島より澎湖島に達する海底電線は、實に局を此地に設く。

鳳山縣は、臺南府の南八十清里、打狗の東北二十清里の所にあり。人口五千を有し、高さ二米突半厚一米突の土壁を回らし、五個の城門を備ふ。此地本と氣候不順にして、到底開拓の要を達する能はざりしが、林爽文の乱を起してより、大に支那政府の注意する所となり、千七百八十八年、初めて縣城を築き、以て今日に至れり。縣下の要港を、打狗及、東港となす。東港の南六十清里に小琉球島あり、周回二十清里、人口二千を有す。

恒春縣は、瓊瑤に在りて、臺灣極南の地を管し、管下殆んど三角形を爲す。南方の海角を、鷺鑿鼻と稱す。東海岸には、猪勝東・八屈灣・牡丹灣あり、西岸には大沙灣・大坂時・射寮及び、楓港等有す、然れども颶風不時に起り、潮流高く岸を啣んで、數々船舶を轉覆せしむ。縣下最も半風の蕃社に富み、パイワン種五十八社、卑南蕃種四十六社を含む。鷺鑿鼻の東南二十六海里に一島あり。紅頭嶼と稱す。周圍七里、人口千餘を有す。皆蠻民にして、六七蕃社に分れ、耕稼を知らず、専ら漁獵を事とす。生活の状態毫も本島蠻民と差違なしと雖も、性質稍温良にして、馴致し易し。紅頭嶼の北二十四英里、臺灣の東岸寶藏蕃地を距る十五海里に、又一島あり。火燒嶼と言ふ。人口殆んど五百を有す。

嘉義縣は、臺南府城を去る東北一百清里にあり。其境域は東の方蕃地に近く、西の方海に面し、府城は南北臺灣の要衝に當る。人口壹萬五千を有し、周圍に高六乃至七米突の煉瓦石牆を回らし、四個の城門を備へ、東西數哩の山地に一無名の火山あり、四時火焰を上騰し、其東に又河東山なるものあり。其近傍一帶の生蕃は、今日既に歸化して最も順良なりと云ふ。

風俗人情

西部臺灣に居住する土民は、本と支那本部より移住せるものにして、一般に古昔を貴ぶの風あり。輒近福建・廣東・汕頭地方の人種を多く移殖したるが故に、其言語は厦門語を主とし、之に福建省の南部漳州、泉州の土音と、廣東汕頭の土語とを混せるものを使用す。風俗も亦全く本土に類似し、男子は髮を辮にし、女子は足を縮む。唯下等人民は多く徒跣し、其頭の剃髮せる部分に、黒木綿を纏ひて、以て日光の直射を防ぐ。女子は如何に老年に至るも、其白髮に紅き花釵を挿

宗教
家屋衣服
飲食

んで姿色を飾る。島民多く一種の佛教を信じ、頭邊必ず佛像と自己の姓名とを彫刻せる小牌を繋ぐ。其他家屋の構造・衣服・飲食の如き、敢へて支那内地と大差を見ず、唯室内に於いては、家具食器の外、更らに一物の裝飾、若くは玩弄の器なし。其鴉牙を嗜み、蒜を好むが如き、殆んど又支那内地人と同じ。殊に南部臺灣地方の人民は、最も檳榔子を食するの風あり。苟も多數の集會、若くは休憩所(茶店)の如き、必ず先づ檳榔子を販ぐと、恰も本邦人が茶を煎じて他に饗するが如し。故に南部臺灣人の齒色は、痛く黒色を染め出して、殆んど日本婦人の鐵漿を以て染齒せるに勞瘁たり。家屋は、一般に煉瓦、又は石造にして、其前面に一間有餘の屋庇を張出す、故に市街地に於いては、屋庇雨々相隣接し、雨天と雖も傘若くは外套を用ふるの要なきと、尙我北越地方の如し。煉瓦は、粘土を以て長一尺、幅七寸、厚大約三四寸に固め、火焼せずして、唯之を日光に乾かし、直ちに用ふ、故に煉瓦の外部は、更らに瓦を貼り、粘土を以て其接續を保たしむると、恰も往昔の建築にかゝる大名屋敷の長屋の如し。或は更らに白堊を表面に塗抹し、外觀を装ふものあり。屋根は、板を用ひ、本邦の如く天井といふものあり。故に降雨數日に亘る時は、間々濕氣を室内に満たし、殆んど堪ふべからざらしむ。土民は専ら農耕を業となせども、海邊に至れば、男子は漁獵を職とし、女子は魚網を編み、又麻糸を績り各地下等人民の常食は、芋類にして、或は水蒸となし、或は米粥と爲して食し、若くは茄條、即ち切り干芋となして貯蓄し、不時の用に供す。而して土民一般に魚類を好む。然れども漁佃の法未だ備らず、爲めに海産の魚類等は、到底内地の需要を満たすの餘融なきを以て、各地養魚池を作つて、魚類を殖養せり。中等以上の土民は、支那酒、即ち紹興海の如きものを米醸して用ふと雖も、下等人民に至れば、重に芋焼酎を用ふ。

職業

生蕃

東部臺灣は、一帯に戦々たる峻嶺を以て圍繞する蠻境にして、全く生蕃人の住居に係り、其人種は、何の地より來りしや、今詳に之を知る可からずと雖も、或はマレー人種の着漂せるものならむと云ふ。往古は全島悉く此種族の領有する所なりしが、降つて三百餘年前の頃、日本及び和蘭に通じ、後更らに支那人漸く渡來して、西部の平野を占有し、生蠻は爲に、日に其領土感め、遂に内地の山間及び東部臺灣の方位に驅逐せらるゝの止むべからざるに及んで、漸く恨を支那人に結び、其仇人を戮殺し得るを以て、一世の能事と爲し、常に支那人の首級を得んとし、思案を焦せり。甚敷に至りては、宴席に支那人の首級を飾つて其興を助け、若くは自家の床底に之を置いて、終宵の快事とあすものあり。幾年昔て支那指揮官センターラー書を會長啗杞篤に送つて、之に舊怨を棄て、相共に親睦を行はんと謀れる事あり。會長は、乃ち其小女をして返書を致さしめて曰く、『汝支那人の余を欺くと實に甚たし、是を以て余又汝の人民を信する能はず、余と支那帝とは、孰れか滅するに、あらずんば、此の争を止むる能はず』と。而して此小女は、宣教師ヒケリング氏の保護に由りて此地に使命せしものなりしが、支那官吏に對して、毫も膝を屈するの意なく、驕然宛も奴隸に對するが如くして返書を投與し、退去したりと云ふ。蓋し支那人の蕃民に對する、常に誦詐を事とし、瞞過して自己の營利に汲々せるより、相互の反目遂に此極に至れり。彼れ蠻民、本より不文未開舊習を脱せず、争鬪殺戮を事とすと雖も、而かも順朴、最も信を守り、恩に感じて情に厚くして、殆んど小兒の如し。是を以て、其外國人を遇する未だ必ずしも支那人に對するが如く太甚しからず。彼等は斬首の惡弊に浸染せりと雖も、而かも古來會て偽詐盜罪訟争の事なく、常に公平を持して、間々可憐の仁慈心を有す。人若し之に一物を與ふれば、必ず之を公平に折半して、同儕に分ち、敢へて厚薄あるなし、若し誤つて長幼貴賤に依りて、贈賑に輕重を

土蕃の性

土番の家

全飲食

全頭髪
全文身

全衣服

全職業

爲せば、彼等は佛然として怒を發し、人情にわらずとなす。曩年和蘭人の支配せる時、土蠻中耶蘇教を信するもの甚だ多く、蘭語に通じ其文學を解するものも亦甚だ少なからざりき。土蠻は三々五々相集まつて一村を爲し、其周圍に石塊を混せる土壁を築き、以て警戒を嚴にす。家屋は高大約三四尺、直徑三四丈に達する漏斗形の草舎にして、中央に竈を置き、内部を三四室に分割し、臥床は、竹或は板を以て作る、然れども彼等は意の適するに従ひ、地の何處たるを問はず、木葉を布いて假寐し、必ずしも一定の臥床を要せず、食物は甚だ不潔にして、本より菓子なく、飯臺なく、又匕箸もなく、唯木片、或は木葉に盛り、五指を以てつまんで之を食ふと、恰も猿の如し。彼等最も半炙の肉塊を嗜み、又酒を愛し、小兒と雖も、尙鯨飲の快を知る。全身多くは文身を爲し、頭髮僅かに垂れて橄欖色の面を覆ひ、藤又は鷓雉の羽毛を以て裝飾せる帽子を頂き、面に鯨し、耳に環し、頸に小玉を連串せる念珠様の頸飾を掛け、腕に數條の腕環を嵌め、胸間に方面の布片を垂れて、身に短長不等の達戈紋を被り、腹には幅帯を纏ひ、下肢は布片を垂れて、大腿の部分に覆ふ。婦人は特に大布を纏うて腰圍となす。其面貌長く髪を額に垂れて、上下腮部より左右の耳邊に至るまで、盡く花紋を鯨し、殊には、八卦畫の如き異様の圖畫を入墨す。平常麻布の衣衫を製し、或は米苞用の蓆を織る。北方の土蠻は、氣候々々、寒冷なるを以て、鹿皮を以て衣を製す。其様恰も僧服の如くして袖なく、多くは蕉葉製の帽を頂き、羽毛を飾る。土蠻男子の職業は、獵獸にして輕捷殆んど鹿の如く、獵技業に秀づるものは、則ち撰はれて酋長となる。平生網製の囊を負ひ、之に鍋及び鹿皮を收め、雨降れば雨衣となす。鹿を獲れば、到る處に炙煮して食用に供し、連日家に歸るを忘る。争闘の際、又必ず此囊を携へ、敵首を斬れば即ち之に收めて歸る。

農業

稻本

臺灣は地味佳良にして、南部に在りては、夏季北部に在りては冬季及び、春季に定時の降雨あり。尤も各種の農産物の培養に適す。故に支那沿岸地方の人民は、争うて其本土の礫地を去りて臺灣に移住し、農耕に従事し、以て現時の開拓を爲せり。稻米は農産物中、主要なるもの、一にして、米作は一年通例二回乃至三回の收穫を得べしと言ふ。思ふに土蠻の初めて臺灣に来るや、馬來群島より米種を舶載したるもの、如く、現時尙米を稱してプラス、或はアプラスと呼び、全く馬來語を慣用せり。下つて後年に至り、支那人の移住漸く夥多なるに及び、耕作の法も全く支那南部の豐饒なる地方と同一の様式を用ひ、最初先づ特に播種田を設けて種子を蒔き、其苗を水田に移植す。氣候温暖に、地味豐饒なるが故に、三月苗代を準備し、次て種子を蒔けば、稻穂は六七月の交を以て十分に成熟し、第一期の收穫を爲し得べし。既に第一期の收穫を見るや、直ちに鋤を其田に入れ、耕耘の後、第二期の苗代より再び稻芽を移植し、十月の末期に至れば、爰に容易に第二期の收穫を得べし。勉強なる農夫は、十一月より三月に至るの間に於いて、更らに第三期の收穫を納むるとあり。殊に稻田灌溉の法は、西部臺灣の地勢東より西に傾斜し、山間の溪流各所を貫通して海に注ぎ、且つ相互縦横に參差するが故に、尤も米作に利便を興へ、一地域に灌溉せられたる水流は、格段勢力を要せず、容易に下段の地域に達し、漸次最低の稻田を潤すを得べし。米の稱類は、白壳・早冬・双冬・紅米等あり。特に山地灌溉に不便の地に在りては、唯天候の降雨に倚りて、陸稻を植う。其他烏米と稱する深黒の米種を産す。即ち山腹灌溉の便なき地方に産する陸稻の一種にして、重に病者の粥に炊き、或

米の輸出

は煎して茶の如く飲料となす。古來此の如く臺灣の地は、最も多量に稻米を産し、毎歲之を支那内地に輸送し來りしが、漸く移住民の數を増加し、勞働者の輻湊するに従ひ、收穫の稻米は、僅かに島内の供給を充たすに過ぎざるに至り、千八百七十年淡水港及び、今の臺南府より外國汽船のみに搭載して、輸出せる米量一萬噸に上りしものも、千八百九十年には、大に減じ、臺南府の如き、二千噸となり、翌千八百九十一年に至りては、僅かに十噸の輸出にとゞまれり。淡水港に至りては、更らに之より甚だしく却つて千八百九十年に二千二百十噸、翌千八百九十一年に二千六百五十八噸の輸入を見るに至れり。然れども、今後帝國の經營其宜を得て、農耕拓植の法に幾多の改良を施し、此道を獎勵するあらば、更らに多量の米穀を産し、之を支那内地に輸出せんと、蓋し又易々たるのみ。

甘藷

米に次ぎ、日用食料として最も多く耕作せらるゝものは甘藷なり。臺灣に在りて、米作は概ね西部平野の地に限ると雖も、甘藷は山地山腹の高地も、尙平原と同じく毎歲二回の收穫を得べきが故に、單に支那人のみに限らず、土蠻も亦其山林の間地に甘藷を培栽し、以て日常の食用に供せり。故に臺灣の原野を横斷する旅客は、毎季必ず里餘に連亘する甘藷の美品、諸所に點々するを目撃すべし。農夫は、毎年三月に於て、前年の甘藷中、最も佳良なるものを撰びて種子とし、之を耕地に蒔き、施すに木灰の肥料を以てす。斯くて、一月乃至六週日を経過すれば、萌芽は漸次發生して尺餘に達すべし。是に於て切斷して數個となし、更らに之を高畦の上に植付け、若干の水と多少の肥料液とを注ぐ是より十數日を経て、一定の時機に達せば、蔓は十分成長して、各所に根を生ずるが故に、更らに之を數個に切斷するも、敢へて枯傷するとなし。聞くが如くんば、甘藷の收穫は、此再切斷に依りて、非常の増加を見るを得べしと言ふ。第一收穫は、六月を以て終

雜穀

り、七月に於いて第二の播植に着手すべく、其收穫は十月の末期、或は十一月上浣に在り。其他穀類の繁莖は佳良にして、小麥・大麥・稷・高粱・玉蜀黍・油菜・燕豆・石花菜・大根・蕎麥等、四季到る所の田畑に培植せらる。其他芋類は、尤も臺灣の地味に適するもの、如く、種類も亦水陸六種を産し、土蠻の如きは、時に芋を以て非常の好味となし、間々外國人に贈つて、其好意を表するとあり。

芋類

水中、即ち水を被れる平野に生ずる芋に二種あり、甲を檳榔心芋と稱し赤色の斑文を有せる含灰白色を呈し、殆んど檳榔子の根莖及び、内部の肉色に類似せるを以て、此名あり。葉は青く大にして、心臟形をなし、其上面に圓形なる紫色の斑點あり。乙を赤芋と稱し、數多の赤色印形の球根を有し、葉も亦赤色を帯ふ。今陸生、即ち乾燥せる畑地に生ずる種類を擧げば、(一)狗蹄芋は、中根莖の周圍に白色の印球を無數に附着し、球は遂に鵝卵大に生長すべく、尤も支那人の嗜好に適し、(二)を白芋と言ひ、純白にして稍々長形を爲し、(三)を麵芋と稱し、多く麩粉に使用し、或は麥粉と混じ、若くは單獨に使用せられ。(四)を赤竹芋と言ふ、此芋は地下に球根を生せず、符

竹

の如く地上に於ける根莖より幼芽を發生するを以て、斯く命名せらるると言ふ。其他臺灣の北部に於いて、多く竹林を見るべく、其大サ直徑一尺に達するものあり、幼筍は初夏既に萌芽して、食用に供せられ、川流及小河の岸、或は水底に生ずる水草の嫩芽、即ち半は發生せる花朶の萌芽は、尤も外人の愛嗜する處となり、遊は全島の到る處に産出す。

鹽

産業

臺灣南部の主要なる産物を砂糖となし、臺南府を中央とし、南は恒春縣より、琅瑤に至り、北は嘉

砂糖

甘蔗

義縣より、北港に達する海岸一帯の地域は、盡く砂糖の製産地にして、單に日本に輸送せらるゝ、
 臺糖のみを算するも、無慮三四十萬担、即ち六七十萬兩の巨額に上る。甘蔗に二種あり、一を赤
 蔗と稱し、其色赤く、一を竹蔗と稱し、其色白し即ち普通の甘蔗なり。兩種皆成熟の期に達すれ
 ば、七八尺乃至一丈の高に達す。初め甘蔗を植ふんと欲せば、先づ會て收穫して地中に埋め置け
 る莖を切斷し、其各片をして、節を有すべからしめ、春時二十餘日之を水中に浸し、殆んど萌芽せ
 しむるに至らしむ。斯くて適當の時機を俟つて、之を地中に挿み、唯た少許の草と焼ける灰を散
 布し、殊に特別なる肥料を用ひず、殆んど注意の外に放擲す。然れども臺灣の氣候温暖に、且つ
 時々降雨地を潤し、地味又尤も甘蔗に適するが故に、發育大に速に、糖汁も亦充分に含蓄せらる。
 若し之に豆糟の如き、多少の肥料を與ふるが如き注意を加へば、更らに其糖質を佳良にし、其汁
 液を加倍するや、疑を容れず。甘蔗は元來繼續性植物なるを以て、同一地に植置くも敢て不可
 なるとなしと雖も、斯くては、漸く其收穫を減じ、糖質を不良ならしむるの慮あるを以て、臺灣の
 農家は、三年を隔て一年間甘蔗を他に移して、以て地味の瘠類を防遏せり。

十一月、或は十二月に至れば、甘蔗は十分成熟して、糖分を充滿すべきが故に、之を刈取り、束ね
 て砂糖製造場に送る。製造場には、長三尺、直徑二尺程の花崗石製輓の二個相接觸して、直立せ
 るものあり。之に齒輪と、輓軸とを備へ二頭の水牛をして回轉せしむ。左右の兩輓次第に反對
 なる廻轉を初むるに乗じ、工夫は手を以て甘蔗を兩輓の間に挿入す。斯の如くして、汁液は漸次
 搾出せられて、受器内に滴下し、更らに樋管を通じて蒸釜室に來り、大桶内に集まる、此時汁を清
 澄せしめんか爲め、少許の生石灰を桶中に投ず。此の如き製法を以て、搾出する時は、甘蔗百斤
 より汁液五十斤乃至五十五斤を出すに過ぎずと雖も、若し更らに西洋の新式器械を使用すれば、

時間と手数を省き得るのみならず、尙百斤の甘蔗より七十五斤の蔗汁を得べしと云ふ。故に臺
 地慣用の器械を用ひ、挿出せる甘蔗の殘屑を取り、再度此の新器械に上せて、汁液を搾出する時
 は、尙は二十餘斤の汁液を得らるべく、殆んど百分の二十、即ち二割有餘の利益を博するの割合
 なり。憐れにも、支那人の頑迷なる、遂に其利を知つて、今尙は用ふる能はず。

工夫は、大桶内に集中せられたる蔗汁を掬ひ、之を第一の煮釜に移し、微温を以て暖め、次いで第
 二の釜に移し、少しく高度の温を加ふ。此時拘子をして少しく浮昇する泡沫を掬去り、更らに第
 三の釜に移し、此處に於いて暫時汚穢物の液面に表はるるものを除去し、後ち第四の煮釜に移
 し、初めて火力を沸騰點に達せしめ、其煮沸を俟つて蠟灰と落花生油とを調和せるもの數許を投
 下し、汁液を濃厚に凝結せしむるの用に供す。最後に冷やし釜に移し、此時力を極めて汁液を攪
 拌す、蓋し糖分をして均一ならしむるが爲なり。

斯の如くして製造せられたるものは、所謂臺糖なるものにして、臺南(安平港)打狗の二港より輸
 出せられ、明治二十三年に於いて總計七十二萬担の巨額に達し、單に打狗よりのみ日本に輸出せ
 しものを算するも、三十四萬担にてありしと。凡て打狗より輸出せらるゝものを、特に打狗糖と
 稱せり。

臺灣北部の地味は、最も茶樹の培養に適し、氣候も亦其發芽を多量からしむ。當初福建省安地と
 稱する地方の貧民、初めて茶苗を北臺灣に移植してより、漸次好果を奏し、此地方一帯の丘陵は
 茶園の耕耘に伴うて、次第に開拓せられ、今や臺北府の東三十英里乃至五十英里、北の方二十英
 里、南四十英里の地方は、全く茶園を以て満たされ、茶は盡く海外に輸出し、厦門の如きは、近時
 殆んど其貿易を壓倒せらるゝに至れり。茶園開拓の法は、最初草荆叢を拓き、初年に於ては甘

茶

諸、若くは其他の雜穀を培植し、翌年初めて茶苗を植し。此の新開地に於ては、別に一の肥料を施すの要なしと雖も、務めて地上の雜草を除去し、之をして茶苗を阻害せしめざるを要す。然らずんば間々雜草の爲めに、茶苗を滅絶せしむるとあり。植後二年を経過すれば、茶樹は既に其最高に達し、摘葉するに摘す。摘採の時期は、三月に始まり、八九月の交に終る。其間三回の收穫を得べし。此時期に至れば、本島各地の貧民、若くは支那内地人は、盡く製茶地方に集まり、艋舺市の如き毎歲四万有餘の男女を増加すべしと云ふ。而して世人は、概ね此の製茶を以て、一種の綠茶なりと思考すれども、其實通常の紅茶に屬せり。唯製造の法概して、醱酵の製を採用せざる特別の手段を施すが爲めに、殆んど綠茶と同一なる香氣を併有するに至れるなり。是れ蓋ま臺灣茶の、却つて歐州人の嗜好に適し、好評を博する原因とす。

外國商人は、概ね大稻埕に其製茶場を所有す。故に内地に於いて、製造せられたる茶は、一旦盡く大稻埕に輸致せられ、此處に再び仕上製法を施し、而して後ら汽船に搭載す。外人の仕上製穴室は、内に數十人の工人を入るべく、室内には直徑貳尺、深さ二尺を有する數條の竈穴を通じ、殆んど一尺八寸の高を有せる煉瓦石床を以て之を圍み、内に木炭を入れて、十分に燃焼せしめ、其の全く煙煤を生せず赤熾せらるゝを俟ち、粉殺の灰を以て、其上を蔽ひ、火力を柔げ、且つ均度を保たしめ、是に初めて茶を乾かす。此際茶は炙盤に盛られて、絶えず、工人の注意を以て、火上適當の距離に於いて振蕩せらる。既に火當てを終れば、之を竹籃に擴げ、他の小枝、若くは葉莖を拾去す。斯くて製茶の水分、悉く發散し去れるを俟ち、更らに之を篩に蔽へる籠箱中に入れ、初めて輸出せらるゝものとす。大稻埕の外、艋舺も亦製茶貿易の市場あり。

山茶

臺南の東北蕃地に於いて、自然生の山茶を生ず、多くは生蕃人種の日用に供さると雖も、時に或

は支那内地に發賣せらるゝとあり。其他砂連六古里と稱する山茶あり。

藍

臺灣には、特産する二種の藍あり。赤地利、及紅草と云ふ。又姜黃を産す、此者香氣を有し、且つ黄色染料たるべきが故に、南部臺灣の地は、尤も多く耕作して、支那に輸送す。又北部臺灣の各地は、染料薯蕷と稱する野生植物を生ず。球根の外皮は、土色を帯ぶと雖も、其内部は、淡紅色を含み、尤も見事なる紅汁を分泌す淡水港より支那に輸出せらるゝの量、又甚だ妙なり。

煙草

臺灣土民は、支那人たると、土蠻たるを問はず、男女皆煙草を嗜み、多く之を培養し、自家の用料に供す。蕃人は、最も多く之を消費し、或は葉を卷いて卷煙草と爲し、或は竹根を以て、製せる煙管を用ひて吸飲す。

胡麻

臺地産の胡麻は、油質佳良にして其量も從つて多く、以て阿利機油を擬造するを得べし。故に毎歲佛國に向つて輸出せらる種子は、三月を以て播蒔の候とし、七月開花し、十月結實して收穫せらる。

落花生

亞弗利加特産の落花生も、亦臺灣の地味に適し、多量を産し、薑薑及び烏白と共に製油の原料となり、或は食用に供さる。

通脱木及特別麗麻

野生の灌木中、最も有益なる者を通脱木及び特別麗麻の二種となす、前者をファイア、パピリフェラと稱し、到る處の原野に繁茂し、通例高六尺、直徑三寸の堅硬なる幹を生じ、其心髓より善良なる繭紙を得べし。貧民は、多く其採伐に従事して、一年の生計を營むものあり。後者即ち特別麗麻も、亦臺灣部に野生し、油を搾製し得べき原料なり。然れども臺民未だ其實用を知らず、北部の如き殆んど捨て、顧るものなし、唯僅かに南部の貧民に依りて、僅少の油を搾取せらるれども、未だ耕作して之を收穫するの機運に達せず。

苧麻

其他臺灣に於いては、實業者の注意を惹くべき植物甚だ多く一々列挙するに暇なし。若し其一
二を挙げば、苧麻の如き、毎歲六月・八月・十月の三回に採伐するも、其間常に其莖を六尺、乃至一
丈の高さに生長せしめ、内皮即ち青帯の纖維は、製造して優に織料に供するを得べし。淡水附近
の丘山最も多く之を産す。若し此野生に人工の耕作を施し、栽培する處あらば、色澤恐らくは今
日の比にあらざるべく、其試培は、實に農業者一顧の好題目なり。黄麻は多く北部臺灣に耕作せ
られ、淡水河の兩岸一帶の平野は、凡て黄麻の鬱林なり。四月土人が其種子を蒔くや、直ちに萌
芽を生じて生長し、披針狀の葉を出し、八月に至れば、幹上多數の小黄花を簇生し、九月既に一丈
乃至一丈二三尺の幹となり、花散じて種蒴其上に止まる、是に於いて採伐して其皮を離脱し、麻
布を製す。鳳梨、即ちアナナスは臺灣の特産物にして、同じく白く光澤ある纖維は、善良なる織
料に供すべし。其他甘蔗、棕櫚皆各地に産出し、其纖維は凡て粗製の織料とある。而かも、是
れ僅かに土糧の用途を辨するに過ぎずと雖も、後年幾多の攻究、或は重要な織料となるなきや
を保せず。

黄麻

鳳梨

樟樹

樟樹は、土糧の棲息せる東部の山脈に産し、最も彰化縣の近傍オーラン、トコハン等の部分に於
いて、其大森林を見る、良材は板として、貴重器具を製し、其小梢、若くは細屑は、蒸溜して樟腦
を製す。此際特に油質を滲出するが故に收めて又樟腦油を取るべし。樟腦製造の事業は、臺灣
に於ける至要の産業にして、其材料たる樟樹は、殆んど無盡藏と稱するも不可なし。然れども其
茂林は凡て瘴地なるが故に、現今其製造に従事するものは、非常の危険と、苦心とを費やさる
べからず。従て意外の失費を要するとあり。先づ其製造に従事せんと欲するものは、熱瘴、或は
客人を雇うて其腹心の股肱となし、彼をして近隣に住する土糧の會長に金錢を贈與せしめて、製

材木

獸類

鳥類

家畜

造場の保護と、安寧とを倚頼せしむ。然れども土糧は、一朝若し自家の悪感を惹起すべき新事件
の發生するとあれば、忽ち其前諾を翻して、製造場の破壊を試む。故に近時に至りて、各外國
人は自から其製造に従事することを爲さず、蒸餾器を所有するハーク(客人)と特約を結んで、樟
腦の前金を仕拂ひ、彼をして、定時樟腦を納めて、其全額に達せしむ。然れども客人も、亦熱蕃人
種と幾干の相異を有せざる未開の種族なれば、如何に確固たる契約に依りて賣買の安全を企圖
するも、遂に其履行を強ふる能はざるべし。而して支那官吏及び、外國領事も、從來の國習、到
底其商權の保安に任する能はざるを觀破し、數年前より、樟腦事業に對し、何等の苦情と破綻と
を生ずるも、一切放擲して扶助を與へざるべきを協定せり。該業の困難なる、又以て察すべし。
唯支那人の貪婪なる、土糧を驅逐して、一樟樹林を占領すれば、材の大小を論せず、盡く伐採し、
敢へて輪伐、若くは其他の森林保護の道を講せず、漫に自家の糞底を肥さんと謀り、漸く山腹支
那人居住の地域に於いて、樟樹の見るべきものなきに至れり。

其他、北臺灣の山林は、楠榔・小楠木・楓樹・藤等の良材、附若として地を蔽ひ、中部以南の山嶺は、
杉松の巨材を出し、海岸線には、番石榴及び、露兜樹の生長を見る。桃・李・橘・無花果・榕樹、又至
る處に小深林を形作り作る。

若し、夫れ臺灣産の獸類に至りては、其類甚だ多く、東部の山間には、熊・豹・狼の族、三々伍を爲
し、猿・野猪・兎・栗鼠・臭猫・山猫等、隨つて多數に棲息するを見る。西部平原の地に在りては、鷓
鴒・山鴉・鶉・鳩・夏鷄、の尤も多く、冬季は、殊に小鴨及び、鳧の池中に游泳するを見る。唯臺灣に
於いては、鳥鴉を見んと欲するも、到底望むべからず。
家畜に就て、尤も珍らしきものは、水牛にして、農耕に使役すると、恰も本邦の牛馬の如し。乘馬

は、多く驛馬を用ひ、豕は食用に供するが爲め、毎戸飼養すると殆んど支那本土の如く、或は三々列を爲して街衢を徘徊し、市中の汚物を食ふとあり。

鑛業

山地は、總べて蠻地に屬するが故に、臺灣に於ける鑛業は、甚だ幼稚にして、殆んど見るべきものなし。唯北部臺北府の近方に在りて採掘する石炭は、其産額の多量なるに依りて、世の注視を受けるあるのみ。然れども此無量の石炭坑も、從來種々の蹉躓を蒙り、現に尙隆昌の基礎を定むるに至らず、初め支那政府は、一私民各自の採炭に従事するに放任し來りしが、後ち臺灣政廳の買収する處となり、歐州の坑法を用ひて、外人に其監督を委任せり。爲めに一個人私有の鑛山は、全く閉鎖するの止むべからざるに、餘義なくせられしが、支那監督官吏の腐敗と、備外人の私營は、政府の計畫を無効に歸せしめ、遂に鑛業は、再度土人の掌中に歸せり。然れども多年の失敗は、益々鑛業の氣運を疲頽せしめ、漸く其業務を中止するもの相踵ぐに至れり。其後在支那外國某會社の如き、曩年失敗の起因は、全く臺灣巡撫の措置、其當を失せるものとなし、更らに前約に基き、採炭發掘の許可を要請せりと雖も、如何せん、確實なる規約を定めて、採掘せんよは、中央北京政府の認諾を要するの困難、支那流の頑迷固息とは、遂に又々彼等の計畫を畫併に歸せしめ、爾後富業の採鑛は、全く廢絶の姿に歸し、僅かに私民の採掘に依りて、石炭の供給を滿たせり。異日臺地の山脈を踏査し、文明の空氣を導くあらば、全島に散在する無量の石炭は、恐らく輸出上有数の重要品たるに至らん。

鑛泉

淡水河岸一帯及び、其上流の溪谷は、火山脈に屬し、諸所に鑛泉を涌出し、従つて其近方に硫黃の

硫黃

産地甚だ多し、鷄籠川の源泉に存在する一群の硫黃泉の如き、沸騰して高く怒號し、非常に硫黃氣を蒸發す。之を現今從事せる最良の製造地となす。其他此地方の俗谷は、丘陵何れの所を望むも、硫黃氣の沸蒸して、白雲の如く高く天に翳くを見る。

鐵鑛銅鑛

鐵鑛銅鑛の痕跡は、各所に點在すと雖も、未だ採鑛の域に進まず、紅寶石は、土蠻の携ふるもの甚だ多きを以て察するも、古來より東部地方に、其産地を有せしを知るべし。金鑛の發見に至りては、實に最近數年前の事に係る。千八百九十年臺灣鐵道の布設せられんとする頃、曾て米國カリホルニアの金鑛に従事せる坑夫あり、鷄籠川上流鐵橋の工事に使役せられ、一日偶然金粒金泊の存在するを認め、直ちに採砂金業に轉職してより、忽ち採金熱の流行を激し、數千の支那人は、爭うて其大陸を去りて、該地方に群集し、洗金に従事せり。然れども洗金に従事し、毫も其基摸を擴大にするものなきが故に、間々洪水の氾濫不時の疾病等に依りて、其落膽を重ね、空しく蹉躓するを常とす。然れども亦多量の砂金を携へ、本土に歸來するものなきにあらず、其數量の如き、元より凡て彼等の手荷物に隠秘せらるゝが爲め、詳知するに由なし。

金鑛

貿易

兵事上臺灣の位地、斯くの如く重要にして、經濟上其財源も、亦殆んど無盡藏と稱するを得べし。然れども其外國貿易の上に示せる輸出入の統計は、悲しくも輓近數年の比較に於いて、漸次衰頽の觀を呈せり。是れ願ふに、劉巡撫が各種の新事業を起し、其政法を改革するに従ひ、多額の税源を見出さんが爲めに、地税に厘金に、將た輸出税に、唯求め得らるべきの手段を盡して、其貨物に重税を賦課せしに依り、物價漸く下落し、資財家は、其資本を事業に注入せず、勞働者も、亦漸

く其數を減じて、賃金に騰貴を見、遂に此不幸に陥りしものに外ならず。若し當局の施設其宜を得ば、臺地貿易の發達、蓋し期年ならずして隆昌の域に達するや疑なし。今英人アレキシス、ホーシー、氏の國會議院に提出せる臺灣視察報告を掲げて、其一斑を示さん。

支那官吏は、臺灣貿易の奨励せざるべからざるを知り、務めて大陸より移住を勸奨せり。此目的に従ひ、課税は最も卑低ならしめ、地租の如き、有つて無きが如く、輸入品も支那船に搭載せられしものは、一税をも課せられず、僅かに一種の噸税を納めたるのみ。當時未だ厘税の制わらざりき。是を以て、外國貿易は益々進捗し、廈門其他の支那本土より、陸續移住民を流入し、非常に人口の増加を致せり。今臺灣貿易の主腦たる砂糖に付き、發達の證左を見るに、千八百七十年に於いて、六十五萬八千〇九十四ハンドレットを輸出せる砂糖は、千八百八十年に至りては、百二十八萬八千〇九十五に増したりき。然るに、其翌年以後は、漸次衰頹の模様を示し、千八百八十四年までは八十四萬五萬内外を昇降し、同年漸く百〇七萬〇二百二十八噸を計算し得たり。其翌年即ち千八百八十五年は、清佛戰爭の爲め、佛艦隊の封鎖を蒙り、非常の損害を受けたりしが、翌千八百八十六年には、突然輸出税を賦課せられ、地租も亦非常に重課せらるゝの止むべからざるに至れり。此時まで、或は少しく課税せられたる土地、若くは、年税の田畑も新登記の地押調査に依りて、價格以外の租税を徴され、人民は全く其負担に堪へざるもの、如く、若しくは反亂を惹起せざるなきやを氣遣かはしめたり。然れども、政府の威力が此動搖を事なく鎮壓せる後は、小農は盡く零落して、土地を放棄し、年々續々納税違反者を生じ、全く移住者の跡を絶つに至り、資本家は遂に、南臺灣を資本放下の地にわらずと斷定せり。故に千八百八十六年に在りては、砂糖の輸出減じて六十六萬五千〇四十二噸に下り、又村民減少の結果は、賃金を昇騰せしめ、

物價隨つて二倍の高位を示すに至れり。時勢此の如くなりしかば、田畑は全く荒廢に歸し終りぬ。其他銀貨の下落も、亦歐州行の輸出を減削し、全輸物物を、専ら日本及び支那の諸港に限らしめたるもの、如し。

千八百九十一年、臺灣全島の輸出は、百四十萬二千五百七十六磅、輸入百二十五萬三千六百二十八磅にして、南臺灣の全額は、此中輸出入合計七十九萬六千九百十磅を占めり。今假りに南部に於ける不幸なる貿易不振の一表を示せば、千八百九十年に於いて四十一萬七千六百六十二磅の輸入は、其翌年即ち九十一年に三十八萬八千四百十五磅、九十二年には、更らに三十二萬六千四百四十二磅に減少したり。輸出に於いても、千八百九十年に四十八萬六千二百二十二磅の巨額は、其翌九十一年に及び、四十萬八千五百六十五磅、九十二年に三十四萬四千七百六十七磅に縮少せるを示す。

出入船舶の噸數も、亦漸次不振の狀況を示せり。千八百九十年に在りて、其噸數は十三萬三千三百〇五噸なりしが、九十一年に至りては、減じて十一萬一千九百四十七噸となり、翌九十二年にも同じく十一萬九千五百四十五噸を示せり。此時よりして、日本の船舶は、漸く其數を増加して、全年には一萬五千八百四十四噸に達せり。而して臺灣諸港に出入する船舶は、往時多くは帆前船なりしも、十數年前より順次に其規模を狭め、今日に至りては、僅かに支那北部の諸港に往復するのみに止まり、外國貿易品は、總べて汽船に依りて、運搬せらるるに至れり云々。

之を要するに、臺灣は其名の言ひ現はすが如く、一個の美島、即ちフォルモサにして、東洋に於ける無盡藏の寶庫なり。唯支那政府の頑迷奇る、其開發當を失せるが爲めに、空しく鬱烟瘴霧の裡に鎖され、今に天然の樂土を以て、賞せらるゝに至らざるのみ。今や征清の餘惠は、幸に此美島

を帝國の版圖に歸せり。同胞の發奮、其拓殖に従ふ、將さには是より多かるべし。

凱旋紀念帖 入之卷 尾

人卷 説明

眞蹟

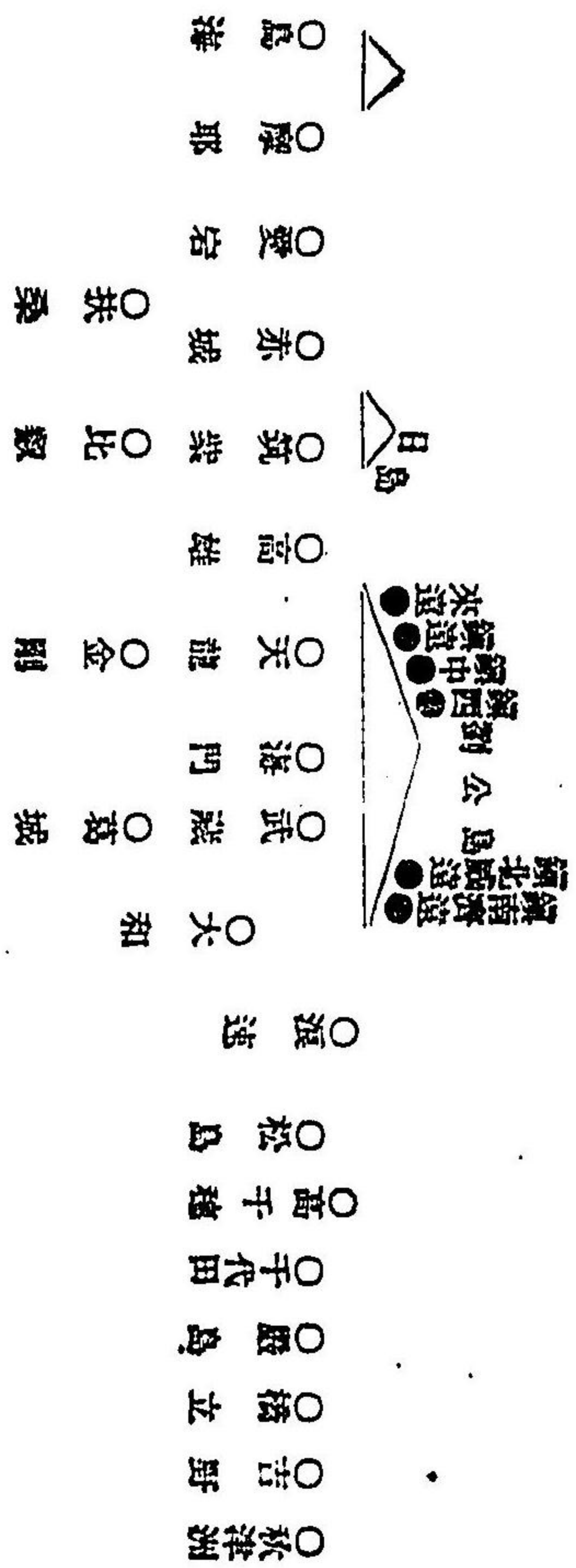
大鳥樞密顧問閣下の眞蹟にて、三千里外啓門局、赤道下邊航路等、呂宋渤泥何國間、南溟群島
 璨如星の廿八文字なり。
 海軍大將西郷侯爵閣下、農商務大臣榎本子爵閣下、樞密顧問官川村伯爵閣下の眞蹟は補遺に於
 て紹介すべし。

圖解

第一は、我艦隊威海衛劉公島攻撃之圖、我艦隊が、伊東司令長官の指揮下に於て、威海衛劉公
 島邊に操縦せる策略、進撃の實狀等は、既に本記に叙する所なれば、今復茲に贅せざれども、本
 圖は、其攻討進撃中の尤も壯絶なる狀勢を描出せるもの、實に當局者の實寫に據り縮撮せるも
 のなり。時は正に明治二十八年二月の上旬、本艦隊並に第二二三の艦隊、各勇を鼓して猛進
 し、劉公島の左右より激烈なる砲撃を試むる所、彼の清艦には卑怯にも島背に潜伏して爲す所
 を知らず、我艦隊の既に彼等を併呑し、丁等の惶懼降を乞ふに至る、當時の光景想見するに足

るべし。

圖中彼我各艦の排列左の如し、○は我艦にして●は敵艦なり。



第二 日比谷の凱旋門は 大元帥陛下の五月三十日を以て宮城へ凱旋せらるゝを奉迎せんが爲めに、有志者の營築せるもの、一にして、國民一致奉公の一端を了知するに足るべし。

第三、上、威海衛港に於ける降虜の上陸、

二月十六日、彼の提督汝昌の自殺し以て其衆を救ふや、我軍輒ち威海衛港の西岸北山嘴水雷營前の棧橋より、彼の乗徒を上陸せしめ、盡く支那内地に放逐したり、棧橋の傍に在るは、敵

艦にして、家屋の破壊せるは砲丸の破壊する所にかゝる。

下、威海衛港の東岸龍廟嘴砲臺北方路邊敵兵の慘狀、即敵兵の火藥庫の破裂のため、身體四肢を寸断せられ、臟腑、迸出、筋肉、糜亂、其慘愴悲慘を極むるもの。

第四 臺灣並澎湖島の圖 地誌と併せ其概要を了するに足る可し、他日臺灣戰記を讀むの素地を得んか。

人、卷 説 明 尾



附言

一本帖ハ豫期ノ初六百頁而シテ此盛舉ヲ容ル、ニ足ラズ、而シテ千頁而シテ千四百頁、尙且ツ餘材ノ存スル者多々、然レドモ其事ノ急ナルヤ、多少ノ遺憾ヲ以テ此成功ヲ緩ニスルヲ得ズ、以爲ラク、均シク遺憾ヲ免カレズハ、寧ロ力ヲ本紀ニ專ラニシテ、而シテ其他ヲ省略スルニ若カズト、是ヲ以テ、傳記以下各篇、尙ホ材料ノ裒然タルニ拘ハラズ、其増補大成ハ之ヲ他日ニ期セリ。

一本帖、其名ヲ問ヘバ、即チ紀念帖、其舉ヲ問ヘバ、即チ四方有志ノ賛同スル所、此責任ト此盛意トニ對シテ、竭サバ、ルベカラザルモノアルノミナラズ、又之ガ續成ヲ慫慂企望スル者少カラス、是ニ於テカ、意ヲ決シテ餘材ヲ蒐集シ、以テ本帖ノ補

遺ヲ廢成セントス。四方ノ諸士其レ亦幸ニ此舉ヲ賛シテ、更ニ倍材料ヲ供給セラレヨ。

一本帖ノ傳記以下各篇ハ、頗ル豫期ト異ナル所アリ、即チ傳記ニ於テハ、戰死者將校ニ限り、奉公記ニ於テハ、赤十字社ノ義舉ニ限り、而シテ頌賛記ハ、供給セラレタル材料ノ幾分ニ止マリ、凱旋記ハ、獨リ大本營及ビ、各軍隊凱旋ノ概況ニ止メ、又臺灣誌モ其ノ梗概ヲ收メ、他ハ皆之ヲ補遺ニ譲リ、且ツ本記中ノ各戰記ノ如キモ、亦間然ヲ免レザルモノアリ、此ニ略ナルモノ彼ニ詳ニ、彼ニ密ナルモノ此ニ疎、疎密詳略相須テ始テ全篇ノ權衡ヲ得ツベシ。

一本帖ハ、客歲九月ヨリ筆ヲ起シテ、本年十一月ニ至リ、即チ一年有餘ノ日月ヲ閱歷シ、稿ヲ改ムルコト亦數次、其間此舉ヲ

贊助セラレテ、直接ニ間接ニ、或ハ材料ヲ供シ、或ハ閱讀ヲ賜ヒシ諸家ハ、即チ監軍山縣陸軍大將、海軍大臣西郷海軍大將、陸軍大臣大山陸軍大將、第一軍司令長官野津陸軍大將、參謀本部次長川上陸軍中將、海軍々令部長伊東海軍中將、赤松海軍中將、土方宮内大臣、榎本農商務大臣、渡邊大藏大臣、東久世樞密院副議長、樞密院顧問官佐野赤十字社長、大鳥樞密顧問官、大木伯爵、津輕伯爵、松浦伯爵、福羽子爵ノ諸閣下、及ビ陸軍大臣副官山内歩兵大佐、河原海軍大佐、石本工兵大佐、大島砲兵少佐、第二軍司令部副官伊豆大尉、第一軍司令部參謀立花大尉、陸地測量部寫真班長外谷大尉、陸軍々務局田邊中尉、長尾海軍少尉、寺尾理學博士、井上文學博士、重野文學博士、川田文學博士、末松文學博士、故小中村文學博士、南摩綱紀、木村正

辭、三島毅、黑川真賴、三輪桓一郎、湯本武比古、杉浦重剛、上原六四郎、内藤耻叟、青山延壽、能勢榮、二宮熊次郎、川北長順ノ諸君、其他諸大家殊ニ此大成ヲ補助シテ盡力尠カラザリシハ陸海軍將校ノ外ニ、井田秀生、土岐秀苗、石田新太郎、佐藤要等ノ諸氏ナリ、故ニ今般告竣ニ際シ、本會ハ茲ニ誠意以テ諸氏ノ功勞ヲ鳴謝スト云爾。

明治廿八年十一月

陸海軍士官素養會

會幹 莊 資 親

凱旋紀念帖補遺發行趣意書

夜光ノ珠、連城ニ値スルモ、而モ纔ニ微瑕アレバ、未ダ以テ完璧トナサズ、磊々玉石混淆ノ中、特リ美珠ヲ以テ重珍セラル、凱旋紀念帖モ、其餘材ヲ捐ツレバ、亦瑕疵アルヲ免カレズ、今ヤ凱旋紀念帖ハ、近ク道廳府縣ノ到ル所ニ歡迎セラレシノミナラズ、遠クハ朝鮮、金州、臺灣ヨリ、歐米諸洲ニマデ傳播シタリ、本會ノ榮實ニ大ナリ、斯ノ如ク世ノ好評、人ノ愛讀、日一日ニ多キヲ加ヘ、本帖ノ聲價大ニ定ルニ至リ、從テ本帖ノ責任モ、亦愈々倍重キヲ感ゼリ、是ニ於テカ、更ニ餘材ヲ蒐集シテ、其瑕疵ヲ癒合シ、其遺漏ヲ點綴シテ、補遺ヲ作ラザルベカラズ、其部分ヨリ言ハバ、即チ補遺、其全體ヨリ言ハバ、即チ本帖、本帖ト補遺ト、素ト一ニシテ二ナラズ、然レドモ、本帖ハ主トシテカヲ戰爭ノ順序、形勢ニ專ラニシテ、其事前ニ詳ニ、補遺ハ專ラ事後ヲ詳ニスルカ、若クハ其成敗スル所以ノ重大ナル原因ヲ叙列ス、即チ戰後ノ今日ニ在テ、須ラク研究、以テ鑑戒ニ資セザルベカラザルモノ多シ、斯ノ如クニシテ、本帖始メテ完璧ナリ、之ヲ龍ヲ畫クニ譬フレバ、本帖ハ即チ其全身、補遺ハ即チ其眼

晴ナリ、眼睛ニシテ一タビ點ゼラルレバ、龍ノ全身忽チ躍ル、龍ニシテ夜光ノ完璧ヲ含ム、連城ノ價值、豈ニ敢テ謂フニ足ランヤ、以上ハ是レ本帖ト補遺トノ關係及ビ、差別ノ存スル所ナリ、然ラバ則チ補遺ハ如何ニ結構セラル、ヤ曰ク、

○臺灣ノ征討 ○臺灣ノ軍政 之ヲ補遺ノ本紀ト爲ス、

本帖ノ補遺トシテハ、

- 各戰記ノ補缺 ○東學黨擾亂記 ○東學黨再燃記 ○韓廷ノ革新
 - 支那事情 ○國論 ○外評 ○忠勇逸話
 - 奉公紀事 ○名譽談 ○捕虜及戰利品 ○傳記(生存)
 - 詩歌 ○雜記 ○諸表 ○凱旋式及戰捷會
 - 金鵝勳章受領者 ○征清ニ關スル一切ノ受賞者人名 ○恤兵獻金獻品者人名
- 其他重大ナル許多ノ問題ヲ網羅ス、此篇ハ特ニ教育上ノ訓諭トナル者最モ多シ、冀クハ四方ノ諸士、倍舊ノ愛顧ヲ垂レヨ、目下編纂中ナレハ、近日印刷發行スベシ、體裁ハ凡テ本帖ト同クス、尙紙數豫約方法等ハ、更ニ公告スベシ。

凱旋紀念帖

和洋折衷美麗なる表装とし中判參冊
龜甲綴帙入紙數壹千四百餘頁
定價金貳圓市外遞送料金三拾錢

本帖は征清役の顛末を記して大小遺漏あることなく一は以て 大元帥陛下の御威徳を頌贊し奉り一は以て斯役の實歴家及遺族の紀念とし一は以て一般詳知の便に供し永く後世に傳へ傳へて現代國民の事業を示し益將來國民の大責任を悟了せしめんとの旨趣に出でたるものにて本帖の如何は今更喋々せざるも將校若くは新聞雜誌等の公評の在るあり左に其の四五を掲載せり大方の諸君以て本帖眞價の存する所を諒知せられよ

(日本新聞評) 征清の舉は振古の鴻業偉蹟たる今更贅言を要せざるなり世上區々之が記録なきにしも非ずと雖も未だ以て千古に傳ふるに足らず竊に以て遺憾となす今此帖を看るに記事精察微引旁博隱を發き要を摘み體裁結構又坊間射利の冊子に似ざるなり士官素養會にして始めて之ありといふべし本帖を分て本紀と參照とし本紀は事端、京城の變に起りて鳳凰城の陥落に到り參照は日清韓交渉の由來其他勅令公文報告書等を収む別に卷首に闡明なる寫眞版十數葉と卷尾に説明の一覽を附して題序詞等の解説を爲す注意周到といふべし

(讀賣新聞評) 本帖ハ記事本末の體裁により征清の事蹟を叙述せる者にして本紀傳記凱旋記奉公記願讚記臺灣誌の六篇に分ち開戦の起源に始り大蘇の凱旋に終る精確なる材料に基きて編纂せるが上幾多將校の校閱訂正を経たる由なれば事實の信憑すべきは固より言ふに及ばず坊間幾多の杜撰新著とは大に其撰を異にする者の如し又卷首には參謀本部海軍々令部より下附の原版を復寫縮影せる寫眞銅版の圖畫數十葉あり鮮明觀るべし大山野津土方榎本等文武名公の眞蹟題字あり其人を見るが如し近來の好著と謂ふべし

(日々新聞評) 古今未曾有の偉業東西比類なき名譽たる征清役の始終を詳記す其體は紀事本

末にして日月を以て之を行り明細該博を極む本巻は京城の變より鳳凰城の陥落に至るを本紀とし朝鮮出兵に關する日清兩國政府の公文戰時に於ける諸勅令等を參照とす戰史としては素より多少の缺點なきにあらざるも其材料の豊富其記事の正確に至ては紛々たる冊中に頭を抜く況んや戰闘地圖の鮮明無比なるに於てをや

(時事新報評)

凱旋紀念帖は過般戰爭の結果として未曾有の偉業を成就し無類の名譽を發揚したる事蹟を編述するものにして全部を天地人の三卷に分ち先づ第一卷を發行せり編纂の體裁は紀事本末體に日月を追ふて記するの法を取り一卷には京城の小闘を發端として豐島、成歡、平壤、黄海等の海陸戰爭及び北清各地に於ける第一軍の戰狀を述べ參照として日清兩國の公文押收文書、戰時に於ける勅令等を掲載したり記事の撰擇に付ては十分注意したるが如く文字も又平易にして讀みやすければ一通り戰爭の始末を知るには便利ならん追々は忠勇軍人の履歷、國民奉公の事蹟、臺灣地理等をも編述すべしと云へり

(中央新聞評)

陸海軍士官素養會の編輯發行に成り本記傳記凱旋紀念奉公記頌讚記臺灣誌の六大陸に分ち日清戰爭と及び其直接間接の關係事蹟を明確に記叙せる者にして蓋し征清史中の翹楚なり卷首には兩陛下三親王の尊影及山縣野津兩大將伊東海軍中將等各將軍の題字あり亦測景部の戰地寫真十數葉を添へ錦上更・花を添ふるの趣あり

(報知新聞評)

凱旋紀念帖は征清の偉績を後世に傳へ現代の士氣を鼓舞せんが爲めに由でたるもの本書は其第一卷天の部に於て無慮四百餘頁の大冊なり山縣、野津、伊東、川上、渡邊、土方、東久世諸氏の題字大小二十有七の石版畫等景致兼ね備はり謹嚴の筆を以て韓山の變より鳳凰城の界に至るまでの事蹟を敘し付するに各種の公文及び政略等を以てす凱旋紀念帖の名に負かず

(毎日新聞評)

本帖は日清戰爭の始末を記したる者にして、京城の變より鳳凰城の陥落に終り、參照として之に關係する重大の事件を擧げたり紙數四百餘頁の大本、記事簡明にして要を

得たり、十數葉の寫真銅版頗る美なりといふべし

(國民新聞評)

凱旋紀念帖は筆を東學黨の蜂起に起し鳳凰城陥落に擱く材料豐富文章流麗にして近來世間に流行する戰爭記と日を同うして語る可くもあらず精密なる寫真版十數葉を挿

(東京朝日新聞評)

題字には山縣野津兩大將伊東川上兩中將東久世伯土方渡邊(國武)二子序文には福羽子寫真には 兩陛下有柳川小松北白川三殿下第一二軍司令部將校大孤山沖海戰第一軍仁川上陸其他猶々くの圖畫あり本帖編輯の體裁は本紀傳記凱旋紀念奉公記頌讚記臺灣誌の六大段に分ち其の材料の精選事實の精確は本帖の尤も主とする所にして絶大の偉業を後世に傳へ國民永遠の紀念に供せんことを期するものなりといへば夫の一時の好尚に投せんとする坊間流布のものとは良に其選を異にするを知るべし

(教育報知評)

現今の著述社會を見るに、單に美華を飾り、事實を虚飾するか、或は單に讀者の嗜好に投せんとする營業的の書冊多し(中略)這般の歴史亦此者流の手に出でんかと歎きたりき。然るに今凱旋紀念帖出で、其の杞憂は全く杞憂として過ぎしなり。本書は(中略)此新紀元の消息を網羅して餘温なく。記事本末體を大綱とし月日を以て之を行り、特に軍隊の離合集散の跡、其内外表裏に起れる美事奇蹟及び特殊の事情、其直接と間接とを問はず燎として活劇を眼前に現出し來る。編纂者の言に「材料は躬此戰爭に閱歴せし軍人の指示と軍人以外に實見せし從軍者の談話とに重きを置き之を戰地報告官報及び當時の諸報若くは軍人の書簡等に徴し且つ之を精確なる地圖に照し而後叙述編纂し尙其實地に參與せし幾多將校の校訂刪補によりて大成したり」と云ふ。何にさま其記事の緻密正確なる、或は未だ世に公表せられざるの紀事往々散見するを認め、或は責任を有する所の貴顯紳士陸海將校數十名の題字頌讚詩文等の掲載を見るは左もありなむ。(中略)第一如何にして此書が斯く廉なるか、第二此詳密なる紀事を編纂せるは何人なるか、編纂者腦髓は如何に緻密なるか、第三如何にして此緻密な

る材料が得られたるか云々

(教育時論評) 本帖は、日清戦争の偉績と、其直接間接の關係を網羅するものにして、一般國民の紀念として、後世に保存すべきもの、一たり。本書は筆を戦争の發端に起し、編を鳳凰城の陥落に結ぶ、其材料は、實際の戦争に當りたる軍人及從軍者の談話、戦地報告、官報、及軍人書簡等に據りて之を記し、之を本紀、傳記、凱旋記、奉公記、頌讚記、臺灣誌の六大部分に分ち、本書には本紀のみを収めたり。行文は普通人に解し易き記事戰記體を以てし、難解の箇所には、傍訓をさへ附したれば、戦争の事蹟を知るには、最便なり。殊に卷首には、兩陛下の御肖像、及故有栖川大將宮、及小松宮北白川宮兩殿下の肖像、山縣、野津、伊東、川上諸將軍、土方子爵、東久世侯爵等の眞蹟、及海軍司令部參謀本部寫眞班にて撮影せし、第一、二、司令部將校、大孤山大海戰、鴨綠江、九連城、旅順口、威海衛等各地の形勢摸樣を寫せし原圖を複寫撮影せしものを掲載し、卷末に之が説明を附せり。頃日來日清戦争に關する著書、陸續として世に出でたれども、何れも粗陋雜駁、毫も信を置くに足らず。本書の如きは、精細明確、毫も字句の修飾を加へず、優に後世に傳ふるに足るべし。猶次の地の卷人の卷の世に公にするの速かならんことを望む。

(國民の友評) 本書發行の目的たる光榮ある日清戦争の事蹟を編纂して、一般國民の紀念とするの趣旨に出づ、天の卷筆を東學黨の發端に起し、鳳凰城の戦に結ぶ材料豐富事實適切なり以上は本帖天の卷の發行に當り夫々批評せられたるものなり尙地人の卷の分も集録すべし已に既に世の公評斯の如し又嗚々自費を要せざるなり

神田區裏神保町六番地

高等學術研究會内

發行所

陸海軍士官素養會

學術の研究は進歩世界の最大急務なり故を以て學術の書出つる汗牛充棟當ならざるも概ね淺薄腐陳諸君の尙ほ進んで自家の補全を希望する者又は尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校の教師諸君と欲する諸氏の學の資料となるべきものに至ては殆んど聞くことなし是れ殊に高等學術研究會を設立せし所以なり

學問の進歩は進歩世界の最大急務なり故を以て學術の書出つる汗牛充棟當ならざるも概ね淺薄腐陳諸君の尙ほ進んで自家の補全を希望する者又は尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校の教師諸君と欲する諸氏の學の資料となるべきものに至ては殆んど聞くことなし是れ殊に高等學術研究會を設立せし所以なり

東京市神田區裏神保町六番地

高等學術研究會事務所

高等學術研究會規則

蓋聞ク眞理ハ惟一耳矣究メテ而シテ得ズンバ又究メテ而シテ又究ム遠セズンバ止マザル也是レ古今研學ノ徒ノ躡出スル所以ニシテ抑モ亦學說今日ノ進歩ヲ致シタル所以也願フニ舊說廢レテ新說之ニ襲キ新說亦衰ヘテ更ニ後ノ新ナルモノ亦之レニ代リ推移行以テ眞ニ近ツクハ是レ洵ニ進歩世界ノ常狀也然リト雖モ學說ノ興廢朝夕ヲ期セズ昨非今是人ヲシテ眩惑其適ク所ヲ辨セザラシムルモノ抑モ今日ヨリ甚タシキハ莫シ學ヲ若シ晏然三日ヲ送ラハ恐ラクハ櫻花已ニ空ニシキノ歎アラシク世間茲ニ觀スル者アリ頃來競フテ諸科ノ講義録ヲ刊ス其數多クハ牛ニ汗スルニ足ル獨リ憾ムラクハ其多クハ主トシテ實文字タルニ進歩ニ裨ヒアリト爲サン耶吾等不佞之レヲ陋ニシテ間々陳腐ノ說ヲ交フル尠シトセズ寧ロ以テ進歩ニ裨ヒアリト爲サン耶吾等不佞之レヲ慮ル久シ矣即チ相讓シテ後ニ高等學術研究會ナルモノヲ興シテ各科專門ノ領學ニ囑托シテ其該博ノ識蘊積ノ驗ニ成レル學術諸科ノ講義録ヲ同好ノ士ニ頒タシテ高キニ就キ新ラシキヲ求メテ奮キヲ法ゾキ序ヲ逐ヒ順ヲ釋テ以テ同好ノ士ニ頒タシテ高キニ就キ新ラシキヲ求メテ眩惑ノ間ニ拔クト擾々タル學說界ノ指針タルトニ於テハ吾等請フ豫メ之レヲ誓ハン

高等學術研究會規則

- 第一條 本會ハ高等ノ學術ヲ研究セント欲スルモノ、爲ニ其資料ヲ供スルヲ以テ目的トス
第二條 本會研究ノ學科ヲ分テ文科及ヒ理科トシ、科目ハ左ノ如シ(學科目ハ漸次増設スベシ)
(一) 文科 倫理學 教育學 心理學 國文學 漢文學
(二) 理科 數學 物理學 地文學 動物學 植物學
第三條 本會ハ各科學門ノ碩學大家ニ請ヒ高等文科及ヒ高等理科ノ講義筆記ヲ刊行ス
第四條 本會ハ研究期ヲ十五ヶ月トシ、毎月二回(高等文科講義一回、高等理科講義一回)各科講義
第五條 本會ハ會員ヲ爲ニ特ニ講習會ヲ開設スルコトアルベシ(更ニ第二期ニ繼續セリ)
第六條 本會ハ會員タルノ爲ニ講習會ヲ開設スルコトアルベシ
第七條 本會ノ會費ヲ定ムルコト左ノ如シ
一 文科 一ヶ月分會費金參拾錢 一 理科 一ヶ月分會費金參拾錢

- 文科 倫理學講師 文科大學教授 中島力造君
東洋倫理學史 文科大學教授 井上哲次郎君
文 學 博士 木村應太郎君
教育學講師 文 學 博士 有賀長雄君
教育史講師 高等師範學校教授 湯本武比古君
數 學 講師 高等師範學校教授 三輪桓一郎君
物理學講師 農學院教授 北尾次郎君
動物學講師 農學院教授 石川千代松君
(イロハ順) 文學博士 飯島 真賴君 文學博士 加藤 弘之君
(イロハ順) 文學博士 黒川 真賴君 文學博士 寺尾 壽君
附言 講義録ハ明治廿七年五月ヨリ發行ス◎其程度ハ高等師範學校高等學校及ヒ大學ノ間ニ在
◎文部省檢定試驗問題答案ヲ每號ノ附録トス

陸海軍士官素養會趣旨

我大帝國國民ノ忠勇ニシテ氣概ニ富メルハ古今一徹、道般征清ノ舉ニ於テ俄ニ特發シタルモノ
ニ非ス、是レ全ク根元的精神教育ノ、古來ヨリ行ハレ來リシ結果ノ、一朝有事ニ際シテ顯揚シタ
ルナリ、此機更ニ尙武的教育ノ必要ヲ促シ、一抄時ト雖モ忽且ニ附スヘカラサルニ至レリ、蓋シ
將來ノ日本ハ陸海軍ノ擴張、今日ノ如キモノニ非ルハ勢ノ然ラシムル所ナリ、隨テ有爲ナル軍人
ヲ要スルコトモ亦幾倍シ、是ニ於テカ國民一致益固有ノ精神ヲ保養シ、愈國ノ富強ヲ増殖シ、以
テ一朝事アラハ奮テ他敵ニ當ル準備ヲナサ、ルヘカラス、殊ニ我皇土ハ國ヲ舉テ兵ナラサル男
子ナク、王制ノ下悉ク軍人ナラサルハナシ、畏クモ 天皇陛下ハ躬親ラ大元帥タラセ給ヒテ、國
軍ヲ總統シ給ヘリ、我國軍人ノ名譽コ、ニ依テ極ルト云フヘキナリ、然レトモ有爲ノ軍人タラン
モノハ、普通教育ノミヲ以テ直ニ適セリトスルモノニ非ス、必ス別ニ一種ノ教育ヲ受ケサルヘカ
ラス、即チ軍人ニ要スル學術ヲ磨キ、以テ軍人タルヘキ氣象ヲ養ヒ、遂ニ軍紀ニ習慣シ、初テ一團
一隊ニ於ケル一致同體ノ動作ニ熟スヘキモノトス、今ヤ此名譽アル軍人ヲ望ム幼壯日ニ加ハリ
テ、或ハ幼年學校、士官學校、又ハ兵學校ニ入ラントシテ、都下ニ篋ヲ負ヒ來ルモノ一年ト多キ
ニ傾クト雖モ、其素養學力ニ缺ク所アリテ、其志ヲ達スル能ハサルモノ尠カラズ、而シテ其十中
七八ハ、爲ニ却テ都下ノ惡風ニ染ミテ身ヲ誤ルニ至ルハ、甚遺憾トスル所ナリ、是レ地方ノ在學
便宜乏キニ因ルモノ多キニ居ル。
此ニ陸海軍士官素養會ヲ興スモノ、實ニ是ニ所以ヲ存スルナリ、本會ノ期スル所ハ、有爲ナル軍
人タラントスルモノニ、其資養學科ヲ供スルニアリテ、乃チ家ニアリテ學習スル所ノ便宜上、通
信教授ノ方法ヲ設ケ、講師ニハ軍部教官、並ニ當該大家ニ請ヒ、其講義ヲ輯録印刷シテ、陸海軍所
管學校、即チ幼年學校、士官學校、又ハ兵學校等ニ入ラントスルモノ、及ヒ現ニ軍學生、軍人ニシ
テ篤志ノ者ニ頒チテ資セントス、是レ固ヨリ營利ヲ目的スルニ非ルコトハ、先ニ高等學術研究會
ヲ與シテ、世上ニ信用ヲ博シタルヲ以テモ證スヘシ、今ヤ此舉十分ノ究討ヲ經テ、完全ナル上ニ
モ完全ヲ期セント欲スルヨリ、當局有爲ノ貴紳ニ訪ヒテ、悉ク其高見ヲ敲キタルニ、陸海軍有力
ナル將校等ノ、大ニ贊成ヲ得タルモノ多ク、或ハ貴重ナル助言ヲ與ヘラレ、又ハ將來ニ於テモ注
言等ヲ與ヘント約セラレタルモアリ、是レ本會カ、偏ニ國ノ干城タル有爲ノ軍人ヲ鑄治セント
ノ熱心ヨリ、繁劇ナル諸君ヲ煩ハシテ高見ヲ聽キ、尙現ニ聽キツ、アル所ナリ、請フ日本固有ノ
精神ヲ具ヘテ、帝國國民タル責務ヲ全ウセントスル人ハ、本會ニ入リテ其教養ニ與ル所アレ。
明治廿八年三月 陸海軍士官素養會

陸海軍士官素養會規則要旨

- 第一條 本會ハ陸軍士官學校、幼年學校並ニ教導團等ニ入ラントスルモノ若シクハ海軍所管學校ニ入ラントスルモノ及ヒ軍部學生又ハ現軍人ノ爲ニ必要ナル教養學科ノ資料ヲ供スルモノトス
- 第二條 本會講究科ハ零士官學校幼年學校兵學校等ノ學科ニ準ス其目左ノ如シ
 武育科 漢文 國語 科作文法 歷史科 日本、支那、朝鮮、南洋 地理科 日本、支那、朝鮮、南洋
 物理化學科 數學 科算術、代數、幾何、三角術 動物植物科
 生理衛生科 外國語科 圖書科
- 第三條 本會ノ講師ハ陸海軍所管學校ノ教官並當該大家ニ請ヒ各專門ノ學科ニ就キ其講義筆記ヲ刊行シ(陸海軍候補學科講義ト題ス)毎月二回(大冊)會員ニ配附スルモノトス
- 第四條 本會豫習期ハ十二ヶ月ヲ一期トシテ第二期ヲ以テ終了スルモノトス但シ一期ノ終リ毎ニ學科修了證ヲ附與スヘシ
- 第五條 本會ノ會員タテントスルモノハ何人ニテモ之ヲ許ス但シ入會金三十錢並ニ二ヶ月以上ノ會費ヲ副ヘテ申込ムヘシ
- 第六條 本會ノ會費ハ一ヶ月金三十錢トス
- 第七條 本會々員ニハ會員證ヲ贈リ以テ本會員タルヲ標識ス
- 第八條 本會々員ハ講義中ノ事項ヲ質問スルヲ得ヘシ但往復郵稅等ハ自辨タルヘシ

東京市神田區裏神保町六番地 陸海軍士官素養會事務所

丁抹 碩學ハラルドヘフヂング著
日本 文學博士 元良勇次郎序

石田新太郎譯

心理學

既刊 總クローヌ金文字入 中判
紙數三百六十餘頁
定價金七十五錢
郵稅拾錢

元良博士 本書に序して曰く「ヘフヂング」教授は新心理説を採る人にして而も一派の説に偏せず現今の思想界に明通し著述者として歐州稀に見る所なり 其著思想該博

且深遠記述明白にして秩序其宜しきを得讀者をして知らず

識らずの間に心理の奧義を悟了せしむるに足るべし云々此の如きの良書な

ればこそ本會殊に撰出して之を世に紹介する所以なれ

神田區裏神保町六番地

發行所

高等學術研究會事務所

緊急廣告

膺德の皇師、蠻烟瘴霧の間に馳驅する筈に殆ど一年、武張り威揚り、彼の土を削ぎ彼の償を納れ、日章軍旗を擁立して、千古に名譽ある大勝の凱歌を奏して本國に旋る、我が四千萬の同胞は宜しく滿腔の誠衷を以て此の凱旋軍を歓迎し殊勳を表彰せざるべからず、而して征清の舉は永く國民の記憶に存して忘るべからざるものとす。我社紀念用の物品を調達せんが爲め開業以來日淺しと雖、**公私立學校有志團體兵員慰勞會**等よりの御用極めて多し實に本社之幸榮なり依て此際一層業務を擴張し益々誠實と廉價とを以て其要求に應じ共に與に祝賀の微意を表せんと欲す希くは諒察を垂れよ、

注意 見本御入用の方は定價の外一品毎に郵税四錢御送附
被下度候書留を要する者は尙六錢を添ふべし

凱旋紀念盃

- 安寶母尼製 徑二寸五分(入箱) 金十錢目リ
- 洋白製 徑二寸五分(入箱) 金六十錢目リ
- 純銀製 徑二寸五分(入箱) 金五十四目リ
- 木盃一號 徑三寸(入箱) 金廿五錢目リ
- 同三寸組 大(三寸六分) 中(三寸二分) 小(二寸八分) (入箱) 同製 金一圓廿五錢目リ

以上大小何れにも御好に隨ひ調製可致候
外に陶器蓋、國旗、紀念、運功、附屬品、數種
慰勞狀等石版活版其他一切の印刷物、美施と廉價を以て調製可致候

凱旋軍歡迎用品調達所

東京市神田區
裏神保町六番地
東京市神田區
裏神保町六番地

帝國凱旋社
東京教育社支社

